

## 2 金沢大学角間遺跡 第2調整池南地点

### 1. はじめに

金沢大学角間遺跡は角間キャンパス内で確認された遺跡の総称で、1996～1998年度にかけて調査が行われた学生寮建設予定地地点(『金沢大学文化財学研究1』)や、今回報告する第2調整池南地点が含まれる。本調査は、金沢大学角間キャンパスにおける金沢大学総合移転第Ⅱ期事業に伴う事前調査として行われたものである。

### 2. 遺跡の位置と地理的環境

金沢大学角間遺跡第2調整池南地点は石川県金沢市角間町に所在する(第39図)。当地点の南側には、医王山へと繋がる県道芝原・石引町線が走っており、「二俣越え」と称される、田上、二俣、富山市坂本を結ぶ古道沿いに当地点は位置する。南西方向には、小立野台地及び浅野川が望め、南東方向には、戸室山及びキゴ山が遠望される。

本調査区付近は、昭和30年代まで梨などの果樹園であり、調査区南西部は畑地であった。その後、中央部以北には杉が植林され、南西部は荒地として放置されていた。調査直前の中央部以北は雑木林であった。中央付近の山へ登っていく尾根筋西に、学生寮建設予定地地点から木を切り出すための道路が切り通し状に設けられ、調査区の南西低地は、学生寮建設予定地地点調査時における排土場であった。

また調査区中央と、調査区南西部から調査区外にかけて、畑造成によると思われる段切りが1段ずつ明瞭に残されている。昭和43年の地形図では、遺跡のある斜面地から北部は広葉樹林、麓部分は畑地、その下部は湿地と表記されている。当地点から谷を挟んだ北西には、田上新町の宅地が広がり、南東には医王山病院が建っている。

### 3. 周辺の遺跡と歴史的環境

縄文時代(第39図)の遺跡は、当地点から北東約1kmの金沢大学角間キャンパス第Ⅰ期移転用地内に乾場山遺跡(金沢大学遺跡調査委員会1989)があり、縄文時代晩期中屋式土器を伴う土坑群が発見され、調査されている(金沢市遺跡番号277)。また、石川県遺跡地図(石川県教育委員会1980)及び金沢市遺跡地図(金沢市1991)には、当地点の北方約2kmに、縄文時代早期・中期の遺跡として角間町角間川遺跡(金沢市遺跡番号276)が、北西2.5kmの浅野川に向かう平地には、縄文時代早期・晩期の遺跡として田上遺跡が登録されている(金沢市遺跡番号269)。田上遺跡は1999年度から金沢市埋蔵文化財センターにより調査され、弥生～古代の遺跡が発見されている。

古代に属する遺跡には、当地点から南東約2.5kmに位置する末窯跡群などがある。北西の浅野川東岸の低地には、上記の田上遺跡のほか、奈良・平安時代の若松遺跡(金沢市遺跡番号270)がある。当地点から谷を挟んだ北北東150mには、金沢大学角間遺跡学生寮建設予定地地点が位置する(『金沢大学文化財学研究1』1999年)。学生寮建設予定地地点は、1996年から1998年にかけて金沢大学埋蔵文化財調査センターによって調査が行われた。この遺跡では、掘立柱建物跡、炉跡、礎石、柵列跡などの遺構が確認され、古代後半から中世前半の土師器、須恵器、灰釉陶器(猿投窯)、緑釉陶器、青磁水注(越州窯系)、青磁(龍泉窯系)などの遺物が出土している。遺跡は、山間寺院跡と推定している。第2調整池南地点の北部端、やせ尾根の最も高い地点からは、北に学生寮建設予定地地点を正面から望むことができる。ただし、当地点で古代・中世の遺構が集中する調査区中央～南部は、南向きの斜面であり、これ

らの遺構群が位置する地点からは、学生寮建設予定地地点はまったく望めない。

当地点から南東方向に望める医王山は、白山と同じく泰澄によって8世紀前半に開山されたといわれており、以後鎌倉時代にも白山修験と関わりをもちながら、山臥通峰の地となっていた(宇野ほか1993)。

#### 4. 調査に至る経緯

1997年10月に金沢大学考古学研究室による学生寮建設予定地地点周辺の分布調査が行われた際、当地点の尾根斜面上で縄文土器が採集された。そのため、長さ3mほどの試掘トレンチが設定され、試掘調査が行われたが、遺構・遺物は確認されなかった。次に、角間第Ⅱ工期区内において、1998年10月19日から11月6日にかけて、金沢大学埋蔵文化財調査センターが12カ所の試掘トレンチを設定し、調査を行った。その結果、以前縄文土器が発見された裾野部に近い緩斜面部から、古代・中世に属する土師器が出土し、縄文時代および古代・中世に属する遺跡の存在が確認された。

#### 5. 調査の方法と経過

本調査にあたり、調査区全域に、公共座標に合わせて10m四方のグリッド網を設定した。グリッド網には、南北方向に北からA～のアルファベット、東西方向に西から1～の数字を付し、その交点の南東方向をそのグリッド区、例えばJ10区と表記した。

出土遺物に関しては、重機による表土掘削終了後、表土及び近・現代の攪乱土などから出土した遺物を除くすべてを光波測定器を用いて、位置、標高、層位を記録し、1から通し番号をふった。最終的に、2870番まで番号をふったが、整理作業においても基本的にその番号を用いた。ただし、一部同じ番号・位置記録で異なる遺物を取り上げた場合があり、それらの遺物には整理時において枝番(100b というようにb、c、d…を加える)をつけた。同一個体の接合資料については、接合資料毎に縄文土器についてはJ No.、弥生時代以降についてはHNo.をつけて整理した。

遺物の図化においては、以下の凡例のとおりである。

石器(石皿・磨石など)		土師器器面状態	
研磨	実線	黒色	ウスアミ
スリ面・弱い敲打	一点破線	油煙痕	コイアミ
磨面または摩耗面	破線		
刃潰し	細かい破線		

遺構については、柱穴または径50cmまでの小穴は、Pitと称し、グリッド毎に通し番号を付けた。より大型の遺構、または定型的なはっきりした遺構については土坑とした。それらのうち、弥生時代以降に属すと考えられる遺構については仮にSXとし、縄文時代に属すと考えられる遺構については仮にSKとして、それぞれ1から番号を付した。ただし調査終了後、遺物・覆土の整理を経てから、弥生時代・古代の土坑(調査でSXとしたもの)については、101から番号をふり直し、土坑101～133とした。縄文時代の土坑(調査でSKとしたもの)については、そのまま土坑1～25とした。ただ、現地での層位誤認により、弥生時代以降の遺構から、縄文時代の遺構に変更したものがあほか、近代の攪乱や自然営力による落ち込みであると判明したものは欠番とした。

土坑・Pit以外では、溝、焼土跡、遺物集中を遺構として扱った。溝区画内の貼床面及びその覆土については、「方形周溝状遺構」として整理した。ただし、土坑129や貼床面に伴うPit・焼土は、そのま

ま遺構名を用い、新たに No. を振り替えることは避けた。

調査は、1998年2月17日より調査区と周辺の木々の伐採、表土掘削を開始し、2月25日より人力による掘り下げを始めた。4月に入り、古代・中世面まで掘り下げた結果、方形周溝状遺構や大型柱穴などが確認された。5月に古代・中世面の航測を行い、さらに掘り下げ、縄文面の調査に入った。6月に縄文面の航測を行って、6月30日に調査を終了した。調査面積は5090㎡である。

## 6. 調査結果

調査区を南北に縦断するように設定したベルトセクションによって、1～6層の基本層序が確認された。このうち1層については、重機によって削除したのち調査に入った。2～4層は弥生時代以降、5層は縄文時代に属すと考えられる。6層以下は、黄褐色砂混じりシルト層(図の内容物・備考にある黄砂とは、この黄褐色砂混じりシルトの略)・シルト質砂礫層であり、当地点の地山となっている。以下、本文中で地山と呼ぶものはこれを指す。

当地点からは、主に縄文時代・弥生時代・古代・中世の遺構・遺物が確認されたほか、珠洲焼甕・鉢など中世の陶器片、近世～近・現代の陶磁器の小片が若干量出土している。

### 縄文時代の遺構

縄文時代の遺構は、土坑24基(うち屋外炉3基)、柱穴3基、廃棄場と考えられる遺物集中1ヶ所が確認された(第40図)。ほとんどの遺構・遺物は縄文時代中期新保式期に属する。

遺物集中とした地点は、H・G-12・13区にある。調査区北部の北向き斜面において、北から尾根斜面に挟り込むような埋没谷が存在し、その谷頭部分において、多量の土器・石器が出土した(第41・42図)。当地点出土の縄文土器の大部分は、この地点より出土しており、破片数で約1000片弱の出土数である。図上復元可能な接合土器は10数点を数える。土器に比べ、石器類はさほど多く出土していない。

### 縄文時代の遺物(第43・44・45図)

縄文時代の土器としては、前期から晩期に属する土器が確認されている。

縄文前期に属する土器には、真脇式土器および朝日下層式土器(小島1986)が、数片出土している。

縄文中期に属する土器には、新保1式が数片出土しているほかはほとんどが新保2式、すなわち加藤三千雄の言うⅢ段階(徳前C段階(西野1983))が中心で、加藤三千雄(加藤1995)のⅣ段階(中平段階)が若干あった。地文に単節縄文または木目状撚糸文(単軸絡条体第1A類bまたはc(石岡1983))を縦位に施し、平行沈線文で文様を施す。細いヘラ状工具を用いる軌軸文も多用される。一部は沈刻状に三角印刻される。注目すべき土器としては、西日本系の鷹島式と考えられる土器片が土坑7から出土している。白色を呈する薄手の口縁部破片で、くの字形口唇形にΣ状爪形文が付される。口縁外面には薄手の隆線上に爪形文が付される。口唇上のΣ状爪形文は、数本を束ねた先端加工の竹管を、器面に直角に押圧して施文している(金沢市教育委員会南久和氏のご教示による)。

縄文後期では、後期酒見式に属すると思われる土器片が遺跡全体に薄く分布していた。第44図No.22(378)はやや肥厚した口唇形で、棒状工具による沈線を横走させ、羽状縄文を横位に施す。No.23(1798)は、鉢形土器口縁で、口唇はやや丸みを帯びる。内面に棒状工具による沈線が2本横走する。

縄文晩期に属する土器には、中屋式に属す貝殻縄文の土器No.24(340)と下野式に属す壺型土器の肩部の破片No.25(1293)各1片が出土している。No.24(340)の口唇上は指押圧による小波状を呈し、器面

外面に貝殻条痕が施される。内面は指ヨコナデである。No.25(1293)は、棒状工具による沈線でモチーフが描かれ、無文部はヘラによる磨きと赤彩の痕跡が認められる。

石器としては、剥片・碎片類を含め、115 点が出土した。打製石斧は 12 点出土している。短冊形が大部分で、分銅形の形態は第 45 図 No.2(524)の 1 点のみである。磨製石斧は No.4(127)の 1 点で、刃部のみが残存である。石匙は No.3(253)の 1 点のみで、横型石匙の把手部から体部上半の遺存である。大型粗製石匙も No.5(546)の 1 点で、把手部のみで遺存である。把手部下部の抉れ部で折られている。スクレイパーは 4 点で、No.7(1651)は一側縁に刃部を作り出している。礫器は 2 点確認されており、No.8(64)は石核の可能性もある。No.9(28)は円礫を粗く打ち割って礫器としている。No.10(2194)を含め礫石錘は 3 点あり、扁平な完礫を用い、両端を打ち欠いて礫石錘とする。石核・残核は 4 点で、No.6(1106)は珪質頁岩製の石核と考えられる。剥片・碎片は 38 点で、うち数点にリタッチや使用痕が認められる。No.11(1930)はユーズドフレイクである。磨石・敲石は 28 点で、磨石は、側縁に磨り痕、表裏面に敲打痕をもつものが多い。No.12(2752)・13(2823)がそれに当たる。No.14(618)・15(2216)を含む敲石は長軸の一端または両端に敲打痕をもつものが多く認められる。石皿・台石は 20 点で、一面が凹面になり磨り面がみられる No.16(1308)・17(1895)を石皿とし、平坦面上に磨り面がみられる No.18(1545)を台石とした。その他に軽石が 1 点出土している。浮きに用いられた可能性があるが、特に加工痕・使用痕は認められない。

#### 弥生時代の遺構・遺物

弥生時代に属する遺構は土坑 101 のみであり、丘頂部からやや南に下った斜面で確認された(第 46・47 図)。確認面は標高 92.52m、深さ 11cm と浅い。平面形は楕円形で、長軸方向が北から東回りに 167°となり、長軸 133cm、短軸 86cm である。断面形は浅い不定型な皿形である。地山に類した覆土が 1 層のみ堆積していた。遺物は、土坑北部の上面に第 48 図 No.1(49)の加工礫が遺存していた。大型の自然礫を研磨により方形に加工したもので、特に使用痕は観察されないが台石の可能性もある。土坑中央から南部の中位から底面にかけては No.2(50～54、58～63、67、68、70、74)が細かく割れて遺存していた。これらは、器厚が薄く、全体を丁寧にヘラケズリした小さな平底の甕形土器片である。遺構の形態及び遺物出土状況より、土坑 101 は墓塚の可能性もある。

弥生時代の遺物には、上記のほか、若干の土器・石器が認められたのみである(第 49 図)。第 48 図 No.3(23)は、平底で、底外面に刷毛目調整が施されている。No.4(1516)は、大きめの砂粒を胎土に含んでいる。No.5(717)は小型壺の口縁で、橙色で砂粒の少ない胎土である。

#### 古代・中世の遺構

古代・中世の遺構としては、方形周溝状遺構、風倒木痕、大型柱穴列、焼土跡、柵列、小穴などが確認されている(第 46 図)。特に注目すべき遺構は、土坑 129 とその周囲を溝で方形状に区画した方形周溝状遺構と、それに関連すると思われる周辺の遺構である。

#### 方形周溝状遺構及びその関連遺構

方形周溝状遺構とは、土坑 129 を中心にして、周囲を方形状に溝で囲み、その内部を削平して地山を貼った範囲をいい、K・J-13・14 区、調査区中央の南西に向く斜面部に位置する(第 51・52 図)。北東に I15-K15 柱穴列、南に L13-M13 柱穴列、西に焼土 4 が位置する。溝区画内は削平されており、区画外と比較すると、緩やかな傾斜を残すものの、ほぼ水平な面が造成されている。削平によって最も掘り込ま

れた北東部は、本遺構の確認面と比べ 50cm ほど低い。遺構の南西部は、近代の果樹園造成による段切りによって削平されているため、掘込みの深さは不明であるが、斜面の傾斜からみて、10cm 以下の掘込みであったことが推定される。貼床面は最大 65cm の高低差で傾斜している。

貼床面上には、焼土跡 3ヶ所(焼土 1・2・3)及び炭化物を多量に含む浅い落ち込み(J14Pit13)が発見された。遺物は、溝区画東側貼床面においてガラス玉、西側貼床上 5cm の覆土中において石帯が発見されたほか、多量の土師器片、須恵器片が確認された。また、土坑 129 北側の貼床面上に、ほぼ完形の内面黒色土師器坏 3 個体が遺存していた。

方形状に区画している溝については、北西側の溝は現存の長さ 7.1m、推定の長さ 9.8m、幅 70cm、平均的な深さ 20cm、断面形は逆台形で、溝内部に最大深さ 10cm 程度の小柱穴状の落ち込みがみられる。北側の高い方で底面の標高 80.59m、南側の低い方で標高 80.00m である。北東側(斜面上位側)の溝は現存の長さ 9.4m、最大幅 1m、平均幅 70cm、底面は平均標高 80.60m 程度、最大深さ 50cm、方形周溝状遺構貼床面からの平均的な深さは 26cm であり、若干西側に傾斜して下がる。底面は、一部に最大深さ 20cm ほどの柱穴状の掘込みを持つ。南東側の溝は、現存の長さ 8.4m、推定の長さ 10m である。最大幅 1m、狭い部分でも 82cm とやや広い。断面は逆台形である。北側の底面は標高 80.73m、南側で標高 80.07m と、南側すなわち斜面に沿って傾斜している。南側で、土坑 110 に切られている。南西側は、上述のように削平され不明であるが、いくつか小穴が確認できることから、実際は溝が存在していた可能性がある。その場合、南西部中央には凹凸部分が認められないことから、ブリッジ部等が設けられていた可能性もある。

#### 土坑 129(第 53 図)

K14 区、方形周溝状遺構中央に位置する。平面形は長方形で、長軸 260cm、短軸 116cm、北壁立ち上がりで深さ 112cm、南壁立ち上がりで深さ 96cm である。南西側の段部を除いた長方形部は、上面で長軸 218cm、短軸 113cm、底面で長軸 196cm、短軸 80cm である。断面形は南西に深さ 20cm の浅い段を有するほかは、ほぼまっすぐな立ち上がりである。床面はほぼ水平に作られている。確認面標高で 80.52m、底面で標高 79.33m である。

土坑 129 は、方形周溝状遺構貼床面より掘り込まれている。土坑南西側には、人頭大の石を積んだ状況が認められたが、調査時には崩れて内側に流れ込んでいた。南東部コーナー付近において、石の下部に弱い焼土の広がりが認められた。

土坑内の土は大きく上層と下層に分けられる。下層は地山をブロック状に多く含む一括埋土が充填されており、下層上面には上記の石が散在していた。上層は黒色土中心の土が北東側から互層状に観察された。土坑内部において、木質の棺などの痕跡は確認されなかった。

遺物は須恵器片、土師器底部破片が各 1 片ずつ出土しているが、これらは副葬品の類ではなく、埋め戻し時の流れ込みと考えられる。

#### 方形周溝状遺構貼床面に伴う柱穴

方形周溝状遺構内及びその周辺においては、多数の柱穴・土坑が確認されたが(第 52 図)、これらは以下の 3 つに大きく区分できる。

- 1) 貼床面より新しく、貼床面や溝などを切る柱穴・土坑(K14Pit7・8、土坑 110 など)
- 2) 貼床面に伴う柱穴・土坑(土坑 129、焼土 1～3)
- 3) 貼床面より古く、上面に貼床されたり、1)・2)の遺構に切られる柱穴・土坑(K14Pit10・13・26、土

坑 132 など)

1)～3)のうち、2)の柱穴に関してはさらに3つのグループ(第51図)に区分可能であるため、以下に説明する。ただし、J14Pit13については、炭化物が集中する覆土や浅い皿状の形状から、焼土1～3に関連した遺構であると考えられるので後で述べる。また、本来は溝底面の凹凸であり、削平によって露出した可能性が高いK13Pit4・Pit9・Pit10・Pit11については除外する。

第1のグループは、溝の内側に沿ってめぐる小柱穴群である。J13Pit15など柱穴状のしっかりした柱穴痕も含まれるが、多くは杭痕に近い先端鋭角状の小柱穴である。深さは19～40cmである。溝区画内北側北東から北西にかけて、J14Pit15・Pit6・Pit7・Pit16・Pit8が、東側北から南にかけて、J13Pit14・Pit15・Pit7、K13Pit8・Pit2・Pit3・Pit5・Pit6が並ぶ。南側のK14Pit2(深さ18cm)も同類である可能性があるが、南側では削平のためか他に柱穴は確認できなかった。なお、東側においては同類の柱穴は認められない。これらの小柱穴列は、溝に沿った柵列の可能性はある。

第2のグループは、土坑129と溝との中間位置にあり、全体で方形に配列される柱穴群である。土坑129の北側に、東から深さ20～40cmのK14Pit29・Pit14・Pit22、J14Pit11・Pit12がほぼ直線的に並び、柱穴間は中心間で1.5m～1.6mとほぼ一定している。両端の柱穴中心間距離で6.1mである。東側ではK14Pit29とK14Pit32(深さ20cm)が距離5.4m、西側では、J14Pit12とK13Pit7(深さ26cm)が距離5m、南側ではK14Pit32とK13Pit7が距離6.1mで、全体としては、長軸6.1m、短軸5.3mの長方形を呈する。

上記の柱穴群は、土坑129を囲う建物の可能性があるが、多くは杭痕状を呈することから、掘立柱建物のようなはっきりした建造物とは思われず、簡単な構造物であったと思われる。

第3のグループは、第2のグループの方形柱穴列の内側に存在する柱穴群である。深さ18～48cmのJ14Pit9、K14Pit21・Pit16・Pit28・Pit30と、杭痕状のK14Pit25(深さ21cm)・Pit20(深さ35cm)の2つのタイプがある。第2グループのJ14Pit11とK14Pit14を用いて、本グループのK14Pit16・Pit30と結ぶと、土坑129を囲む南北4.5m、東西3mの方形柱穴列を想定することも可能であるが、方形が歪むこと、深さが一定でないことが難点である。よって本グループは第2グループで想定した構造物の支柱穴の可能性はある。

以上が、2)貼床面に伴う柱穴についてである。次に焼土跡及び炭化物集中(第51図)についてであるが、貼床面上では3ヶ所の弱い焼土跡(焼土1～3)と炭化物集中1ヶ所が確認された。焼土1は確認面標高80.41m、浅い皿状の掘込みを持ちK14Pit13を切る。焼土2は確認面標高80.33m、浅い皿状の掘込みを持つ。焼土3は確認面標高80.25m、やや深い柱穴状の掘込みを持つ。炭化物集中であるJ14Pit13は、溝区画内北東隅付近に位置し、確認面標高80.71m、浅い皿状の掘込みで、不定型な平面形をなし、長軸230cm、短軸140cm、深さ17cmである。土師器坏を包含する。

#### 方形周溝状遺構周辺の柱穴(第52図)

J14Pit5は、北東の溝中央部外で溝に切られる大型柱穴である。長径115cm、短径100cm、深さ77cmである。底面より、鉄釘1点が出土している。後に触れる大型柱穴列に規模・形態とも類似するが、浅く、柱痕は確認されなかった。

J14Pit3は、J14Pit5の北に接して位置する。長径112cm、短径92cm、深さ60cmである。J14Pit3は、J14Pit5より新しく隣接するため、J14Pit5の作り直しの可能性がある。

溝区画西側外には、深さ15～28cmの小柱穴がやや乱雑に並ぶ。北からJ13Pit5・Pit6・Pit9・Pit10・Pit11・Pit12・Pit13である。方形周溝状遺構の周囲に設けられた柵列の可能性はある。

#### 焼土 4(第 54 図)

方形周溝状遺構南西側に隣接して位置する竈状の遺構である。遺構の北側及び西側には多量の粘土ブロックがあり、東側に弱い焼土が存在する。遺構の平面形は隅丸方形を呈し、長辺 292cm、短辺 250cm、最大の深さ 60cm ほどである。断面形は不定形で、底面も平坦ではない。

焼土は、遺構の東側肩部にあり、38cm × 32cm の楕円形をなし、断面形は浅い皿状で深さ 15cm である。焼け具合はごく弱く、下部に焼け込みは及ばないものの、皿状の底面には焼土が貼り付いている。外からの焼土の持ち込みではなく、この地点で数回程度の燃焼を行った痕跡であろう。粘土ブロックは、竈壁体・天井部を形成していた可能性があるが、完全に崩れて掘り込み内に遺存していた。粘土に焼け込みは認められなかった。遺物には、少数の土師器片の他、鉾滓が 1 点のみであるが出土しているため、燃焼は小鍛冶行為であった可能性もある。

#### 大型柱穴列

方形周溝状遺構の北と南に位置する大型柱穴列(第 46 図)は、いずれも径 1.5 m、深さ 2 m 近くあり、円筒状で底面は平坦、中央に径 15 ~ 30cm の黒色土がはいる柱痕が確認される。柱痕周囲は地山を混ぜた土と黒色土とを互層に重ね、一部つき固めたような版築状をなす部分もある。高さのある柱を立てたと考えられるが、組になる柱穴がなく建物にはならない。柱穴間は密なところで 1.8 m 間隔である。

I15-K15 柱穴列は、調査区中央南西向き斜面に、北から I15Pit1、J15Pit1・Pit2、K15Pit1 の 4 穴が並ぶ。このうち I15Pit1 は位置がずれるが、他の 3 穴は南北に直線的に並んでいる。間隔は、I15Pit1 と J15Pit1 の中心間が 4.6m、J15Pit1 と J15Pit2 の中心間が 6.2m、J15Pit2 と K15Pit1 の中心間が 1.8m である。I15Pit1 は、最大深さ 147cm である。柱痕はやや斜めになっており、上部が南側(斜面下方)へ向けて傾いている。J15Pit1 の最大深さは 157cm で、J15Pit2 は 216cm である。J15Pit2 の上部には、柱痕を囲うように大礫 2 点が配されており、柱当てと思われる。K15Pit1 は最大深さ 160cm である。いずれの穴にも中央に柱痕が確認された。各柱穴の柱痕周囲には、地山を混入した土が互層に固められている。

L13-M13 柱穴列は、調査区中央斜面下部から南西部低地際にかけて、概ね南北に、北から L13Pit1・Pit2・Pit3、M13Pit3 の 4 穴が直線的に並ぶ。間隔は、L13Pit1 と L13Pit2 の中心間が 2.5m、L13Pit2 と L13Pit3 の中心間が 5.0m、L13Pit3 と M13Pit3 の中心間が 10.0m である。L13Pit1 の最大深さは 138cm で、L13Pit2 は 189cm、L13Pit3 は 128cm、M13Pit3 は 108cm である。いずれの穴にも中央に柱痕があるが、柱痕が確認できるのは下部から中部までで、上部は柱痕があった部分を大きく掘り込んでおり、柱を抜き取ったような痕跡を残している。柱痕周囲は、地山を混入した土が互層に固められている。

#### 土坑 110(第 55 図)

K14 区、調査区中央斜面部に位置する。方形周溝状遺構南東の溝を切る。基本層序 5 層上面で確認され、平面は隅丸方形を呈し、推定で長軸 240cm、短軸 160cm である。断面はトライ形を呈し、底面はほぼ水平で深さ 38cm である。土坑は 4 層に分かれ、底面から中層にかけて、11 ~ 12 世紀と思われる土師器坏が 3 個体出土している。遺構の性格は不明である。

#### 土坑 131 及びその周辺(第 56 図)

土坑 131 は、方形周溝状遺構から南西に約 40m ほど下った緩斜面の M11 区に位置する。遺構の平面は 550 × 526cm に及ぶ不定形な略円形で、中央部は盛り上がっているが、周囲の溝状に下がる部分では、最大 58cm の深さがある。調査段階では、中央部は強くしまった地山であったため掘らず、周囲の

褐色土の部分掘り下げたため、掘り上がりはドーナツ状を呈している。中央部に地山が再堆積している可能性があることから、風倒木または立ち枯れ状の木根の跡の可能性が高い。遺構周辺には、奈良時代・古代・中世の土師器・須恵器片が集中しているが、主体は調査区中央部と同じ 9 世紀後半から 10 世紀代の土師器である。これらの遺物は、土坑 131 や土坑 133 中層にも含まれている。遺物には、第 56 図にあるようなほぼ完形の小型壺、管状土錘、性格不明の鉄製品も含む。

土坑 131 周辺には、柵列の可能性が考えられる柱穴列や、円形土坑、方形土坑が直線的に並ぶ土坑列（土坑 113 ～ 115・121）、やや深い土坑 133 が認められ、互いに関連している可能性があるため、以下にまとめて報告する。

柵列の可能性のある柱穴群は、土坑 131 を中心に、北西から南東方向にかけて最大 11 基程度並んでいる。このうち 4 基（北西から L10Pit1・Pit3、M11Pit3・Pit4、両端の柱穴の中心間距離で 15m）は直線的に並ぶが、他は 1 ～ 1.8m ほどの幅の中に並ぶという程度に過ぎず、明確な関連性をもった柱穴の組み合わせは認めがたい。やや不揃いながら L10Pit1・Pit3、M11Pit3・Pit4 は直線的に並んでおり、土坑 131 の北側に簡単な柵列が設けられた可能性がある。また、M11Pit5 は、長径 88cm、短径 78cm、深さ 84cm で、規模も大きく明瞭な柱痕をもち、他の柱穴と明らかに性格を異にする。ただし、組み合わせが考えられる柱穴は見あたらない。中層より土師質皿が出土している。

土坑 121・113 ～ 115 は、L9・10 区、調査区中央南部、低位緩斜面に位置する。南に土坑 131 が位置し、北東から土坑 121・113・114・115 と直線的に並ぶ。土坑 121 は、基本層序 6 層上面で確認され、平面形は径 122cm の円形で、断面形は浅い皿状を呈し、深さは 31cm である。近代の畑造成により上部が削平されており、円形土坑の底部近くのみ遺存である可能性が高い。土坑 113 ～ 115 は、基本層序 5 層上面、部分的に 4 層下部で確認された。土坑 113 の平面形は、144 × 130cm の円形で、断面は円筒形を呈し、深さ 56cm である。土坑 114 は、平面形が 188 × 126cm の略楕円形で、断面形は、やや崩れた壁ながら、概ねタライ形を呈し、深さ 48cm である。土坑 115 は、平面形が 200 × 126cm の隅丸方形で、断面形は、やや崩れた壁ながら、概ねタライ形を呈し、西側に若干ながら低く掘り込まれた部分がある。深さ 37cm である。本遺構は、土坑 113・114 などとともに、墓壙である可能性も考えられるが、遺物も出土せず、不明である。

#### 古代・中世の遺物

土師器は、内黒土師器碗、土師器碗・皿・甕など破片にして 945 片が出土した。碗には、平底、脚高台状、三角高台のものなどがみられるが、基本的には底面外側に糸切りが残されている。

第 57 図 No.1(1832)・2(1822)は、方形周溝状遺構中央の土坑 129 から出土した内黒土師器碗底部破片と、須恵器瓶類の肩部破片である。No.5(H15)は、無台碗の口縁から底部の破片である。No.8(1490)は有台碗底部破片、田嶋編年の VI 期である。No.9(H7)は、内黒土師器、田嶋編年の V 期に相当する可能性がある。No.10(H44)は内黒の無台碗、田嶋編年の VI 期に当たる。No.11(H2)・12(236)も VI 期であろう。No.13(H43)・14(H1)は、内黒土師器碗、田嶋編年 VI 期に相当しよう。No.31(1242)は、内黒土師器碗口縁部破片で、田嶋編年 V 期に当たる。No.30(H8)・33(H9)は内黒無台碗で、田嶋編年 V 期に当たる。No.15(H52)・16(H19)・19(H20)・21(H48)は甕、No.17(H16)は埴である。No.19 と 20 は同一個体の口縁と底部である。

第 55 図 No.1 ～ 3 は、方形周溝状遺構を切る、土坑 110 出土の土師器である。No.1(H5)は有台碗で、田嶋編年 VII 期の典型的な高台形態である。No.2(H14)は、回転糸切り痕が認められる。No.3(H4)は、田嶋編年 VII 期であろう。糸切り痕（回転方向右）が認められる。



第 57 図 No.34(1758)は、L13Pit6 中層出土の内黒土師器である。調整粗く糸切り痕が顕著に残る。田嶋編年Ⅵ 2 期に相当しよう。第 57・58 図 No.35～56 のほとんどは、土坑 131 周辺の基本層序 4 層出土である。No.38(222)は内黒有台椀で、田嶋編年Ⅴ期新であろう。No.42(H47)は有台椀の口縁から底部である。No.43(717)は、有台皿底部破片で、田嶋編年Ⅶ期の可能性がある。

須恵器は、破片にして 114 片出土している。高松窯跡群製品が多く、他に辰口窯(能美)、南加賀窯跡群の製品がみられるほか、8 世紀代の末窯跡群製品の蓋、椀が少量出土している。

No.22(H34)は 8 世紀後半と考えられる末窯または高松窯跡群製品の蓋で、No.23(213)は 8 世紀後半の蓋である。No.24(105)は、内面に当て具痕、外面に叩き目を有す甕胴部の破片である。No.22～24 は、方形周溝状遺構西側包含層から出土したもので、方形周溝状遺構に伴うものではない。No.54(1787)は蓋つまみ部破片、No.47(H10)は無台椀の口縁から底部の破片、No.56(H40)は双耳瓶の肩部、これらも高松窯跡群製品と思われる。No.50(1556)は瓶類の口縁部破片で、辰口窯跡群製品、田嶋編年のⅥ期に相当しよう。No.52(860)・53(1257)は、末窯跡群製品の蓋である。No.55(1122)はⅥ期の新しい時期に相当する。No.46(1493)は椀口縁部破片で、油煙が顕著に付着する。

上記以外の遺物としては、鉄・石製品などが出土している。No.58(970)は管状土錘で、土坑 131 周辺の包含層の出土である。No.4(1838)は、方形周溝状遺構貼床面よりの出土で、青色を呈するガラス製の小玉である。径 1mm の孔が貫孔している。No.3(555)は、滑石製と思われる石帯で、一面には細かな貫孔部分が 3 ケ所認められる。各面とも、よく磨かれている。砥石は 4 点出土している。No.63(252)は現存長さ 7.4cm、幅 6.3cm、厚さ 3.5cm、重量 122.1g で、軽石製と思われる。No.64(297)は、長さ 13.5cm、幅 6.4cm、厚さ 2.5cm、重量 420.7g で、砂岩製と思われる。No.65(1757)は、長さ 8.5cm、幅 5.6cm、厚さ 3.0cm である。No.66(810)は、長さ 13.7cm、幅 4.2cm、厚さ 2.6cm で閃緑岩製と思われる。鉄製品は、No.60(1683)の鉄釘、No.59(1745)・62(1390)の刀子のほか、No.61(1540)の不明鉄製品を含め数点が出土している。No.60 の鉄釘は、方形周溝状遺構の北側に位置する J14Pit5 底面よりの出土である。ほかに鉍滓数点が、焼土 4 覆土から出土している。

ほかには、中世に属する珠洲焼の甕 No.57(19)がある。

## 7. まとめ

### 縄文時代

遺構は、屋外炉 3 基、墓壇の可能性のある土坑数基が確認され、遺物集中が調査区北東側の尾根上から北側斜面と調査区南の平坦面上に若干の集中を見せる程度である。居住施設の痕跡は確認されなかった。遺物は、浮線文を配する縄文前期末葉土器が少量、半裁竹管平行沈線を多用する中期初頭土器が少量、後・晩期土器が少量出土している。

当地点の縄文時代には、定着的な居住施設(住居跡)は存在しなかったが、中期初頭におけるキャンプサイト、および各時期にわたる細かな活動痕跡が、少しずつ残されていたと捉えられる。近隣の集落に本拠地を持つ小集団が、定期的な生業活動に利用し、一時的に滞在することを繰り返した地点であろう。今後、周辺の集落との関係などを検討していく必要がある。

### 弥生時代

遺構は、墓壇の可能性のある土坑 101 の 1 基のみで、遺物も土坑 101 内より出土した台石(方形の加工礫)1 点、胴下部～底部と思われる甕形土器 1 個体、約 10 片が主である。遺物はいずれも小片で、摩

耗も激しく詳細不明であるが、弥生時代後期の法仏式から月影式と考えられる。分布は概ね尾根上にまとまっており、この地が積極的に居住地として利用されたとは考えにくく、一時的な利用痕跡であると思われる。

#### 古代・中世

遺構については、埋葬施設と想定される方形周溝状遺構が特筆される。この方形周溝状遺構は、土坑129を中央に、周囲を溝で方形に区画し、溝区画内を掘り窪めて貼床を構築したものである。中央の土坑129は、南側の広がりをもつとほぼ直に立ち上がる壁を持つ方形の土坑で、間に石を挟んで上下層に区分できる。棺などの木質等の痕跡はまったく認められず、遺骸の埋納の有無は確実に捉えられないものの、遺構の形状からみて、周溝による区画を伴う土坑墓の可能性が高い。

1995年の『東日本における奈良・平安時代の墓制』シンポジウムが行われた段階では、北陸（石川、富山、新潟）において、方形周溝状遺構は未確認である。よって、当地点で発見された方形周溝状遺構は極めて珍しく、今後の北陸における奈良・平安時代の墓制を考えていく上で、価値の高い資料であるといえる。

方形周溝状遺構は、千葉県、栃木県、岩手県で多く確認されている。前述のシンポジウムで発表された「千葉県一下総地域一の奈良・平安時代の墓制について」では、方形周溝状遺構を、「古墳時代の終末段階の小型方墳から連綿と続く小型方形区画墓＝方形周溝状遺構及び土壌墓は下総地域における8世紀から9世紀の主たる墓制である」（萩原恭一 1995:235）とし、「8世紀の主たる墓制であるところの方形周溝状遺構が、古墳時代の方墳の延長にある」というように捉えている。また、「上総・安房国の奈良・平安時代の墓制について」では、「方形区画墓は明らかに終末期の方墳から継続的に営まれており、方墳との関連は今後検討しなければならない課題である」（當眞嗣史 1995:72）と述べている。以上のように、千葉県や栃木県、岩手県では、方形周溝状遺構が後期群集墳と混在する例が多いため、方形周溝状遺構を後期群集墳からの継続性を示すものとして捉えており、この分布の集中する3地域においては、「方形周溝状遺構の関係の解明については、やはり古墳時代後期群集墳との関連の分析が必要であり、今後の研究が待たれる。」（栃木県考古学会・第5回東日本埋蔵文化財研究会栃木大会準備委員会 編 1995:52）としている。これらの解釈を援用するならば、当地点の方形周溝状遺構を、石川県における方墳からの系譜で位置づけていくことも可能であろう。しかし注意すべき点は、当地点で発見された方形周溝状遺構が単独で発見されており、さらには北陸において他に類例がないということである。上記の3地域同様、古墳時代後期群集墳との関連で論じることが可能であろうが、他の要因も視野に入れて分析していくことが重要である。ゆえに現時点において、当地点の方形周溝状遺構を安易に解釈し、位置づけることは急ぐべきではない。さらに当地点では、主体部と周溝だけではなく、それに伴うと考えられる柱穴が確認され、上屋の存在が想定できるようになった。これは、前述の方形周溝状遺構の中でも、類例がほとんど確認できない事例である。上屋の存在の可能性も含めて、当地点の方形周溝状遺構をどのように捉えていくか、今後慎重に議論していく必要がある。

さらに重要なのは、当地点から谷を挟んで位置する山間寺院跡（角間遺跡学生寮建設予定地地点）との関連性である。両地点とも出土遺物の主体が田嶋編年のVI期であり、遺跡の存続時期が一致する。久保智康氏は、「古代の山中寺院を考える場合、一つの遺跡だけではなく、遺跡間の有意の関係をたどり、信仰の場を空間的に把握しようとする視点が不可欠」（久保 1998:24）だと述べている。当地点と学生寮建設予定地地点の関係を探るには以上の視点は重要である。さらには信仰の場としての医王山との関連も視野に入れていかなければならないであろう。

南東部の緩斜面に存在した風倒木痕と考えられる土坑 131 とその周辺の土坑群、小柱穴列、古代の遺物集中については、8 世紀代の遺物もみられるものの主体は方形周溝状遺構と同じく、田嶋編年Ⅴ2 期からⅥ期の土師器・須恵器であり、方形周溝状遺構との関係が考えられる。風倒木または倒れる前の「木」に関連した祭祀的行為の可能性もある。類例の増加を待って、検討していく必要がある。

当地点から出土した土師器には、内面黒色処理されたものと無処理のものがあり、器種には、有台椀、無台椀、鉢、埴・甕類がある。時期は、田嶋編年によると、だいたいⅤ期から中世Ⅰ期に属するものである。その中でも、Ⅵ期に属するものが主体であると思われる。

須恵器の器種は、蓋、椀、皿、壺・瓶類(短頸壺・双耳瓶)が出土している。時期は、土師器と同様Ⅵ期に属するものが主体であると思われる。一部 8 世紀後半に属するものが確認されている。産地は、高松・押水窯跡群のものが最も多く、他には末窯跡群、能美窯跡群に属するものが確認されている。

調査においては、金沢大学考古学研究室のほか、石川県教育委員会田嶋明人、(財)石川県埋蔵文化財センター谷内尾晋司、小嶋芳孝、垣内光次郎、西野秀和、安英樹、富山県埋蔵文化財センター久々忠義、金沢大学文学部佐々木達夫、笠井純一、金沢市教育委員会南久和、金沢市埋蔵文化財センター谷口宗治、前田雪恵、京都国立博物館久保智康、古代学研究所・古代学協会江谷寛、松任市教育委員会木田清、高松町教育委員会折戸靖幸、野々市町教育委員会吉田淳、布尾和史、金沢市立美術工芸大学小島俊彰、石川県立内灘高等学校米沢義光、石川考古学研究会加藤三千雄の各氏に御教示を頂いた。

#### 参考文献

石岡憲雄 1983「撚糸文」『縄文文化の研究 5 縄文土器Ⅲ』雄山閣

石川県教育委員会 1980『石川県遺跡地図』

石川県立埋蔵文化財センター 1986『漆町遺跡Ⅰ』

石川県立埋蔵文化財センター 1989『漆町遺跡Ⅳ』

石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編・資料編  
宇野 隆夫・西井 龍儀・久々 忠義・宮本 哲郎・住蔵 久雄 1993『医王は語る』富山県福光町医王山文化調査委員会  
加藤三千雄 1995「北陸における中期前葉の土器群について—新保・新崎式土器—」『第 8 回縄文セミナー 中期初頭の諸様相』

金沢大学埋蔵文化財調査センター 1999『金沢大学文化財学研究Ⅰ』

金沢市教育委員会 1988『金沢市三小牛ハバ遺跡』

金沢市教育委員会 1989『金沢市末窯跡群』

金沢市教育委員会 1991『金沢市遺跡地図(改訂版)』

久保智康 1998「北陸の山岳寺院(Ⅱ)—古代越前の動向を中心に—」『考古学ジャーナル』426 ニューサイエンス社  
小島俊彰 1986「第 6 群土器真脇式期」「第 7 群土器朝日下層式期」『石川県能都町真脇遺跡』

貞末堯司・倉林真砂斗・中村哲也 1989『角間 金沢大学総合移転用地内埋蔵文化財調査報告』

佐々木 達夫・中村 慎一・岩田 安之・湯尻 修平 1995「金沢大学総合移転第Ⅱ期計画地内埋蔵文化財調査報告・1995 年 3 月」『金沢大学考古学紀要』22 号

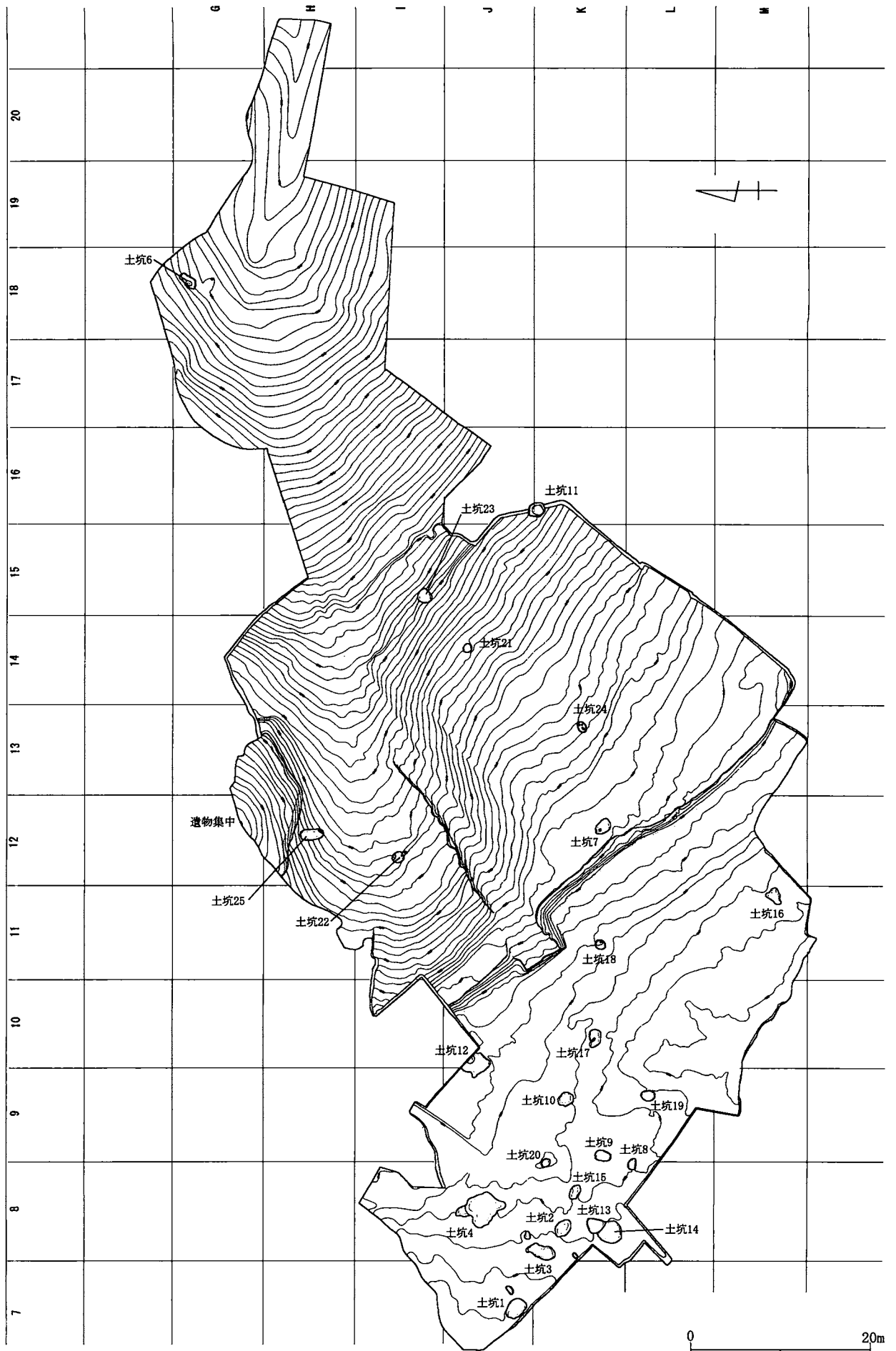
田嶋明人・小嶋芳孝ほか 1989『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会

出越茂和 1992「千木ヤシキダ遺跡に見る十世紀の土師器食膳具」『北陸古代土器研究』第 2 号

栃木県考古学会・第 5 回東日本埋蔵文化財研究会栃木大会準備委員会 編 1995『第 5 回 東日本埋蔵文化財研究会 東日本における奈良・平安時代の墓制—墓制をめぐる諸問題—』

- 西野秀和 1983『鹿島町徳前C遺跡調査報告(Ⅳ)』石川県立埋蔵文化財センター
- 沼田啓太郎 1976「金沢市大桑町中平遺跡報告」『石川考古学研究会々誌』第19号
- 南久和 1985『北陸の縄文時代中期の編年他9編－南久和著作集第1集－』転形書房
- 望月精司ほか 1997『シンポジウム 北陸の10・11世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会
- 山岸共 1977「医王山と山岳信仰」『白山・立山と北陸修験道』名著出版
- 米沢義光 1986『鹿島町徳前C遺跡調査報告(Ⅱ・Ⅲ)』石川県立埋蔵文化財センター





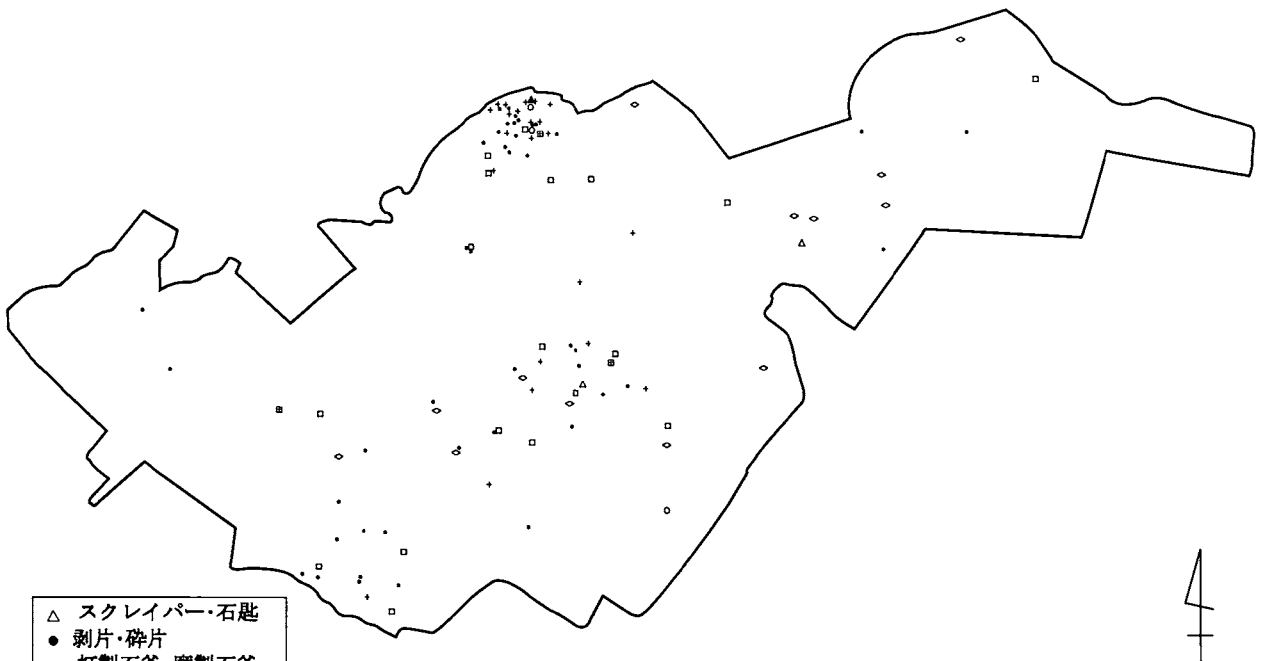
第40図 縄文時代遺構分布図 (1/600)



● 縄文土器

0 30m

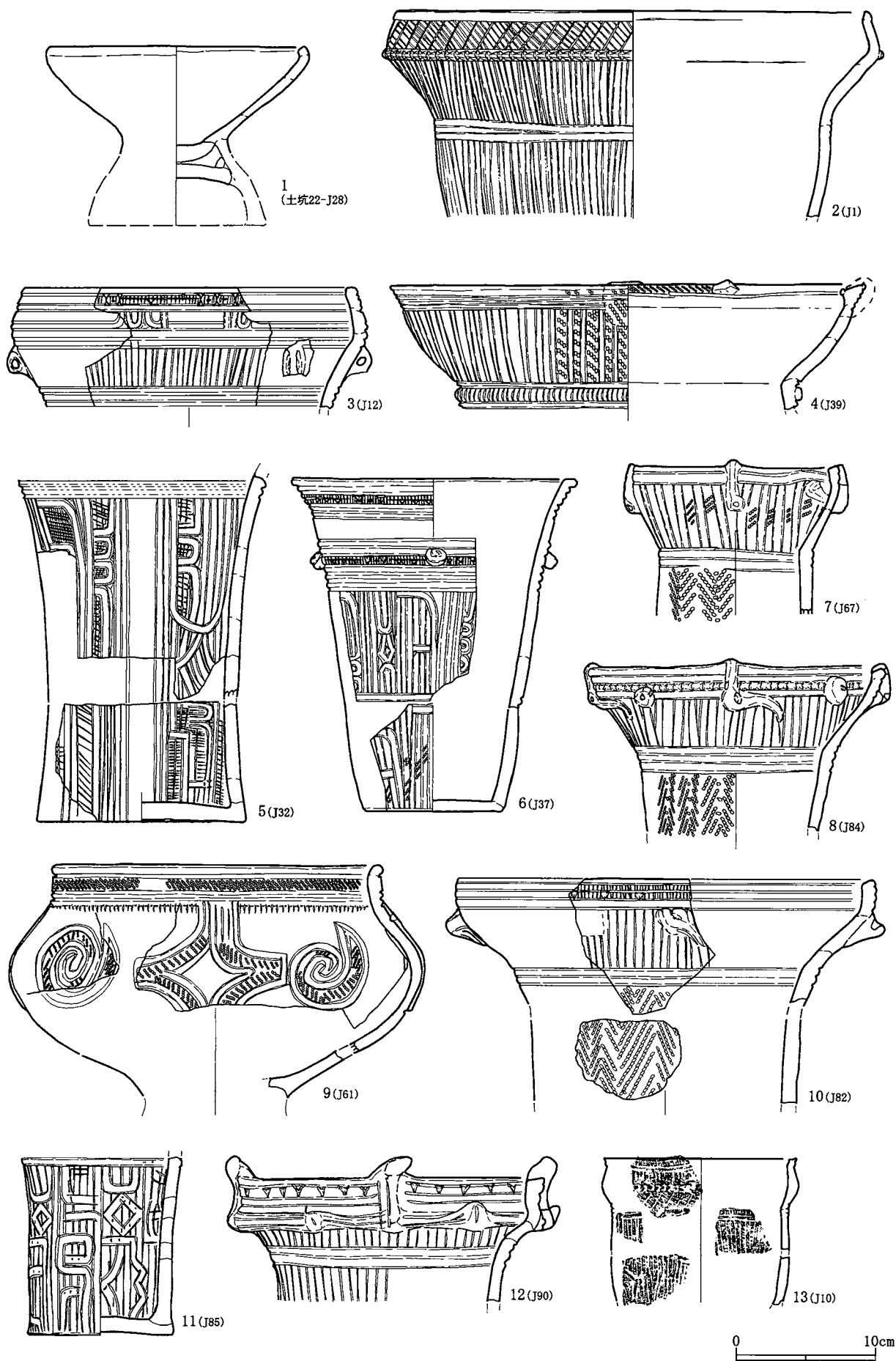
第41図 縄文時代遺物分布図 一土器一 (1/900)



△ スクレイパー・石匙  
 ● 剥片・碎片  
 ◇ 打製石斧・磨製石斧  
 + 磨石・敲石  
 □ 石皿・台石  
 田 石核・残核・礫器  
 ○ 礫石錘  
 ▲ 軽石(浮き)

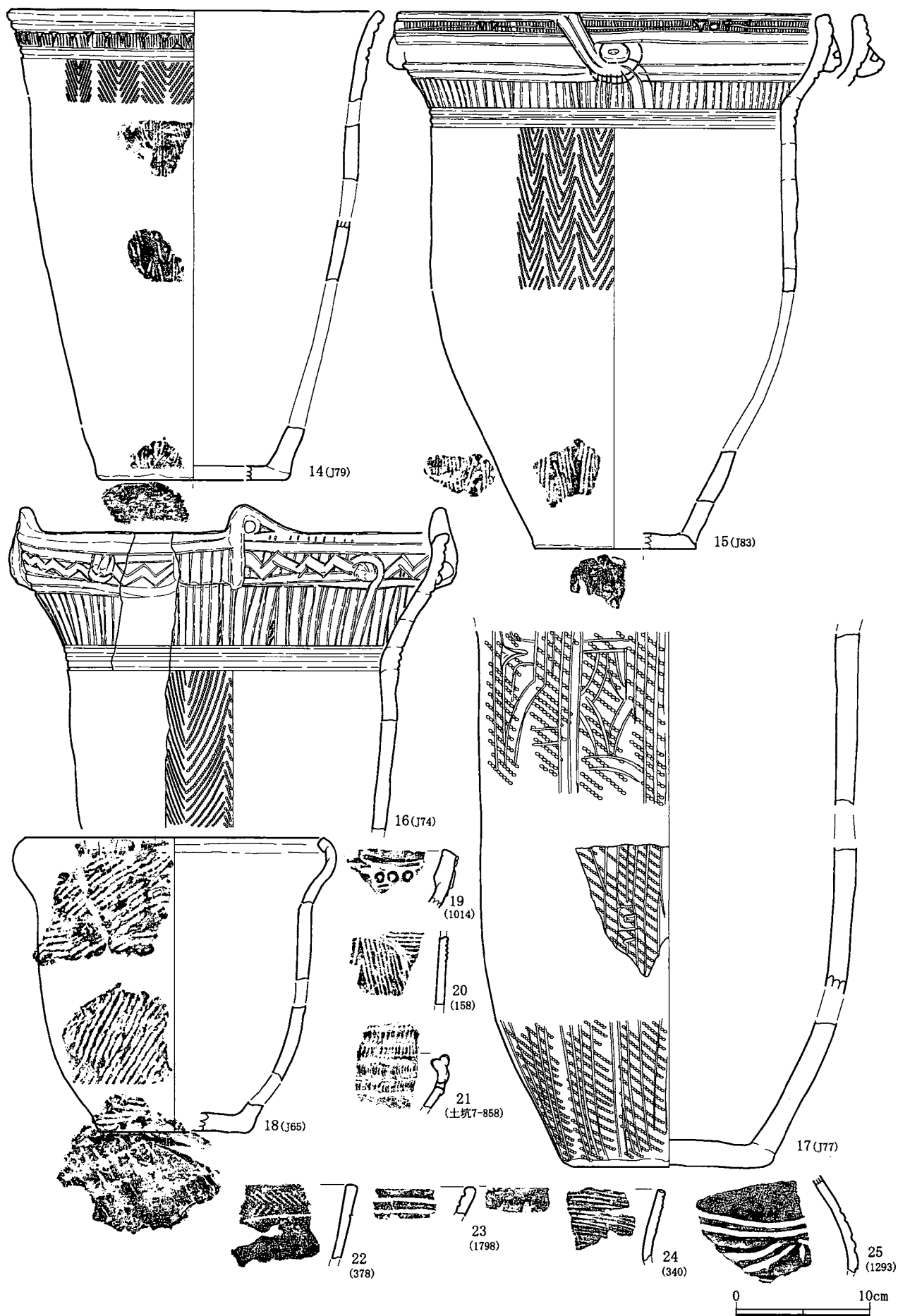
0 30m

第42図 縄文時代遺物分布図 一石器一 (1/900)

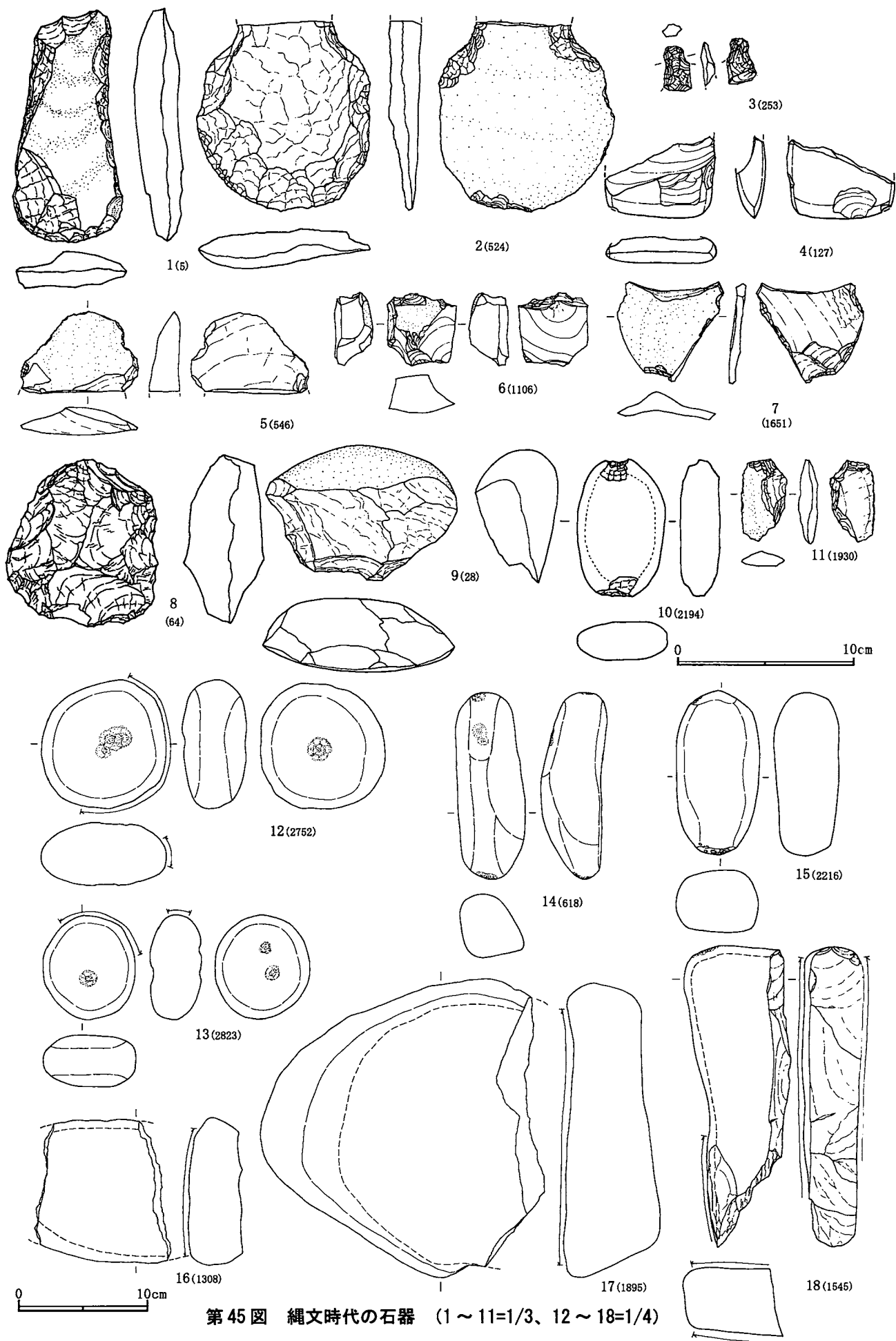


第43図 縄文時代の土器 1 (1/4)

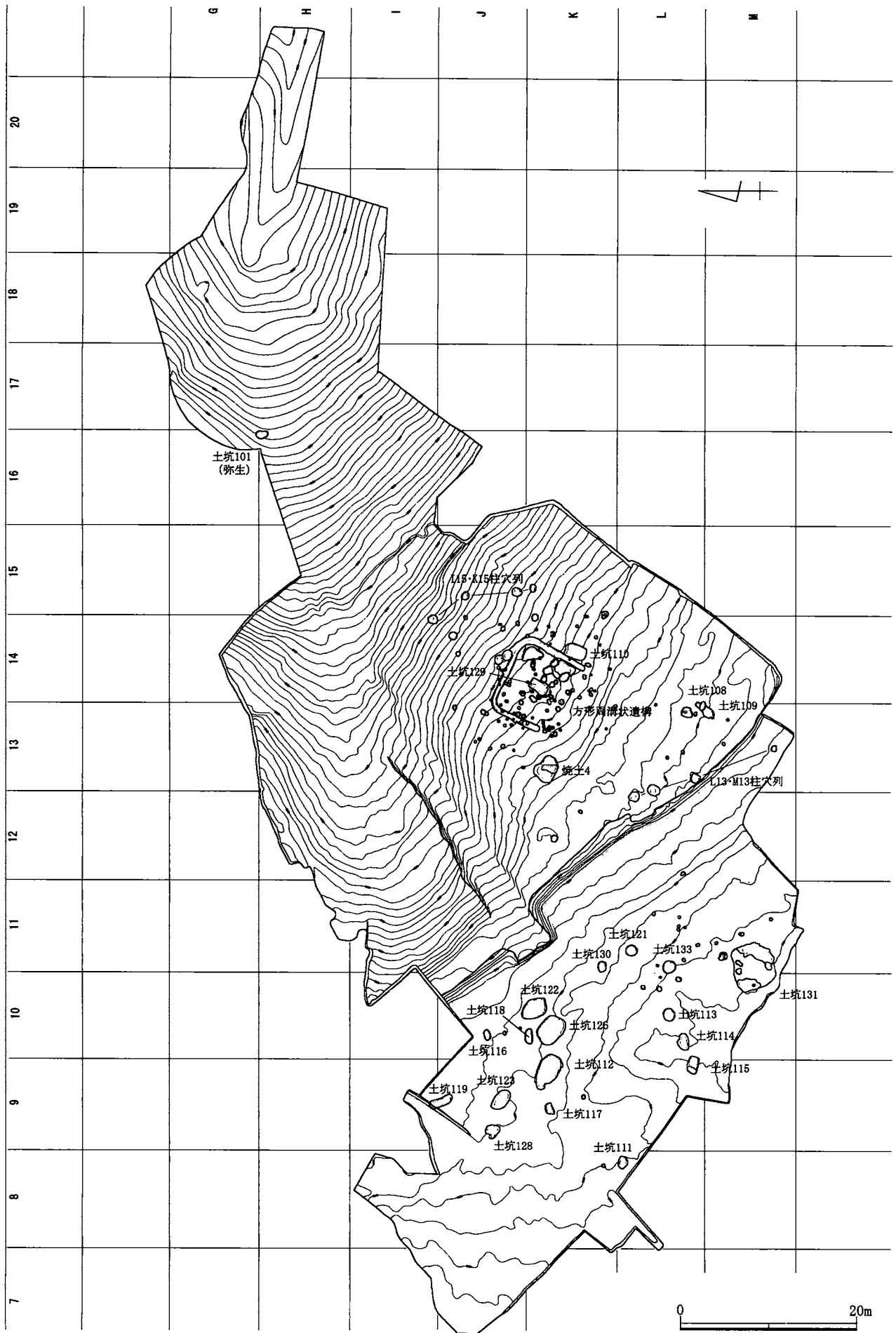




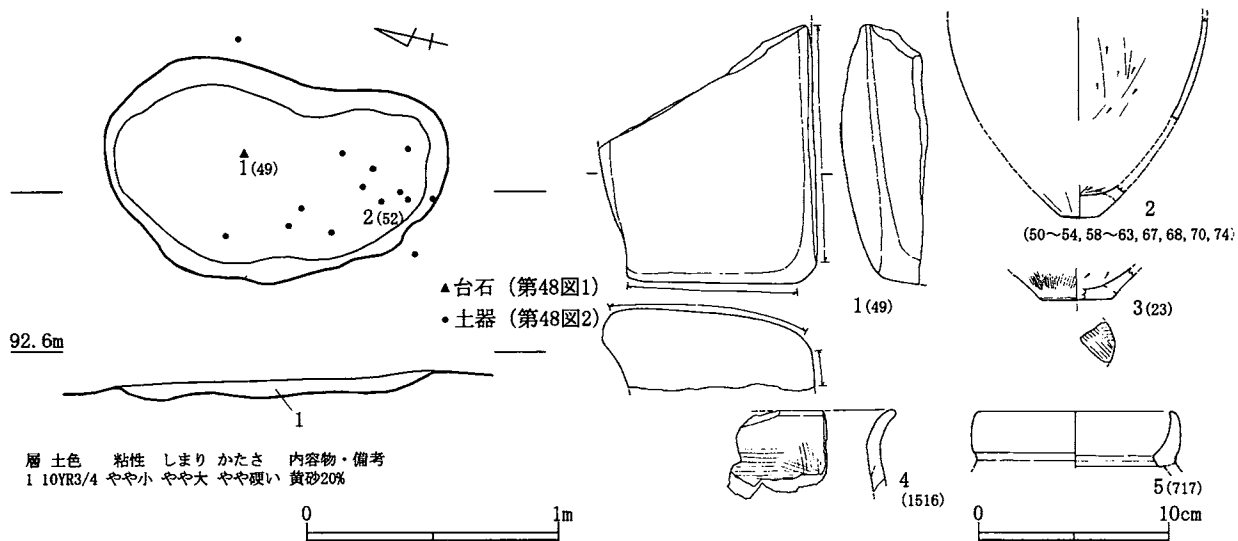
第44図 縄文時代の土器2 (1/4)



第45図 縄文時代の石器 (1~11=1/3、12~18=1/4)

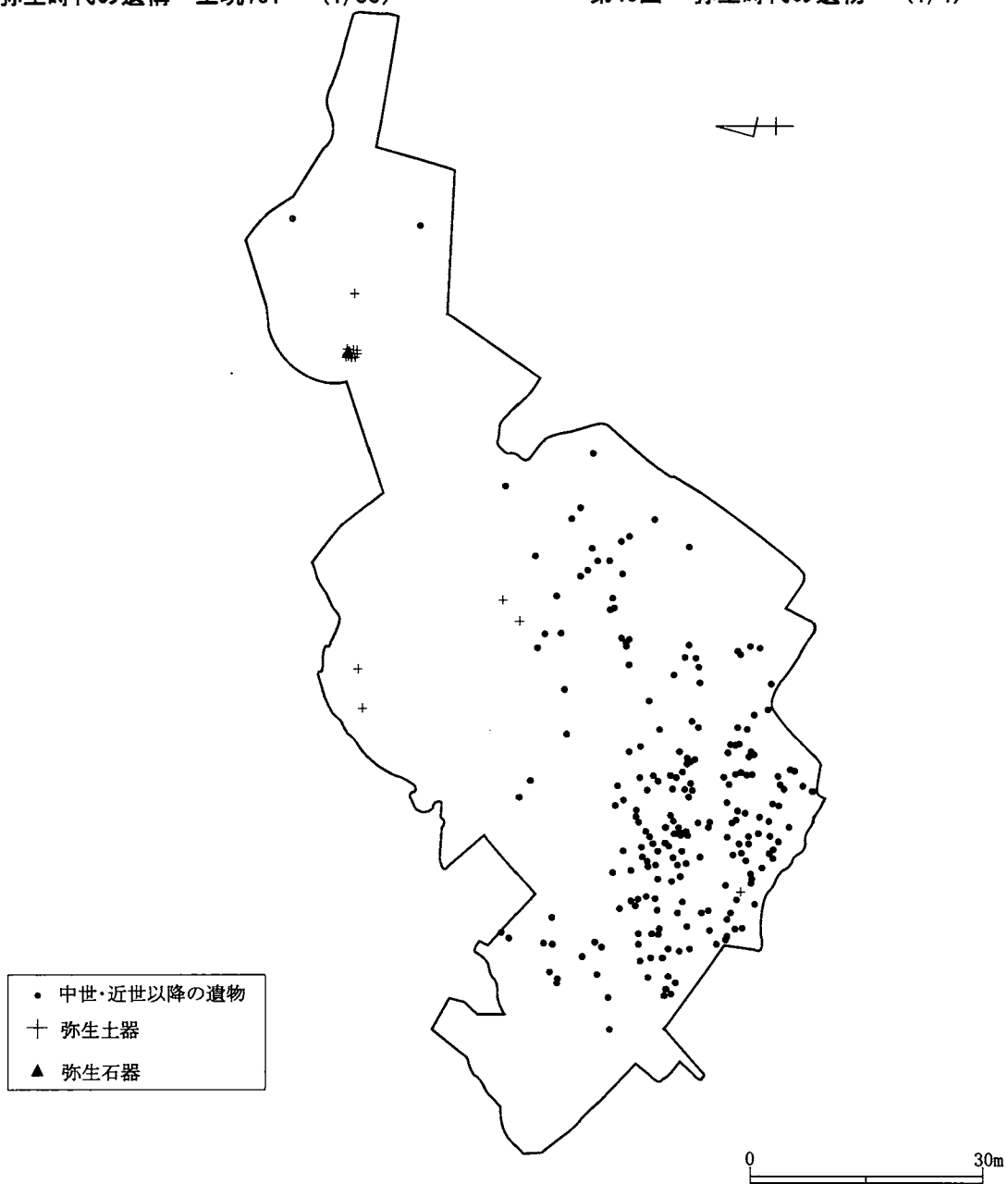


第46図 弥生時代及び古代・中世遺構分布図 (1/600)



第47図 弥生時代の遺構 土坑101 (1/30)

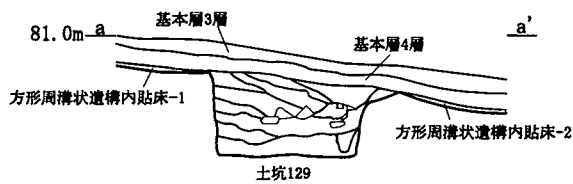
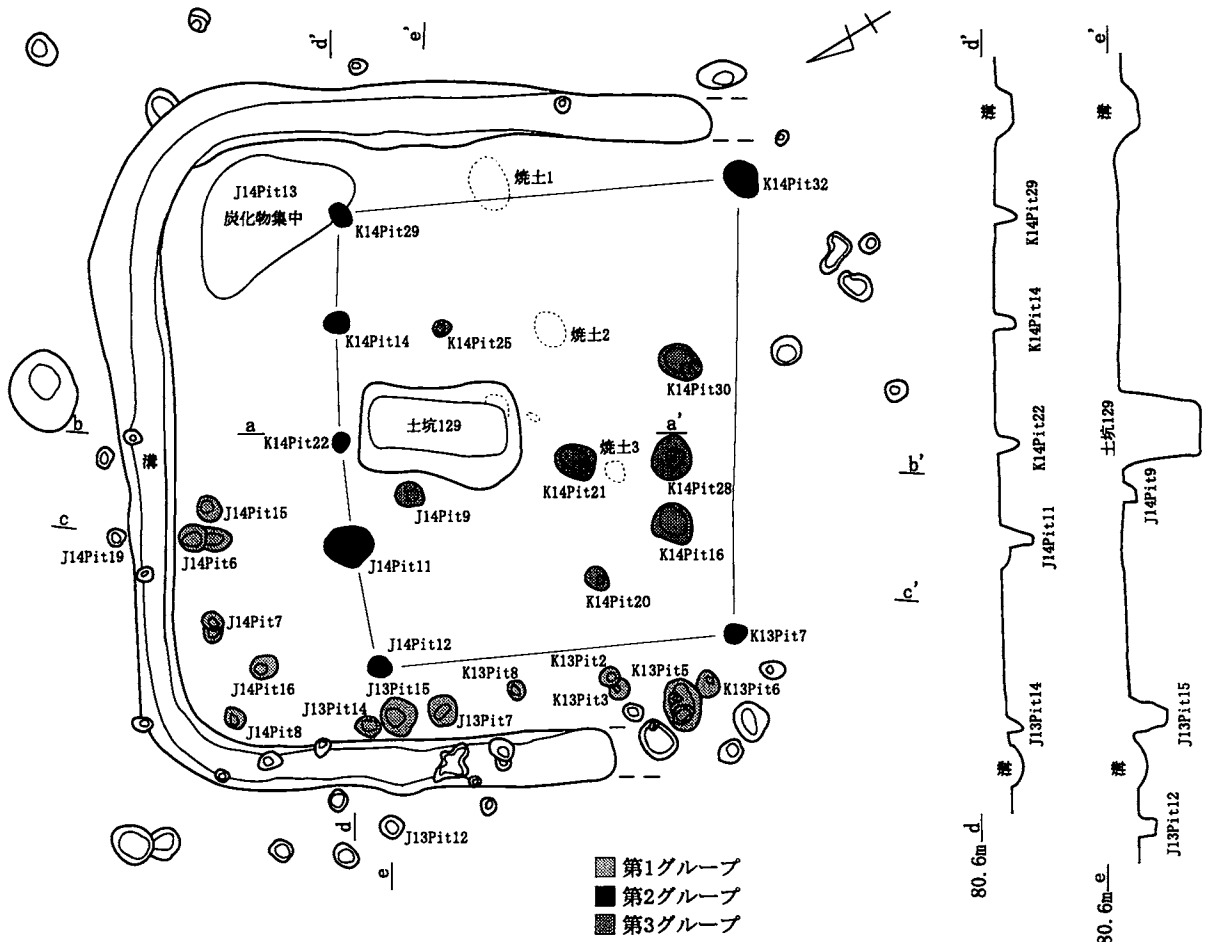
第48図 弥生時代の遺物 (1/4)



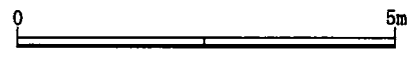
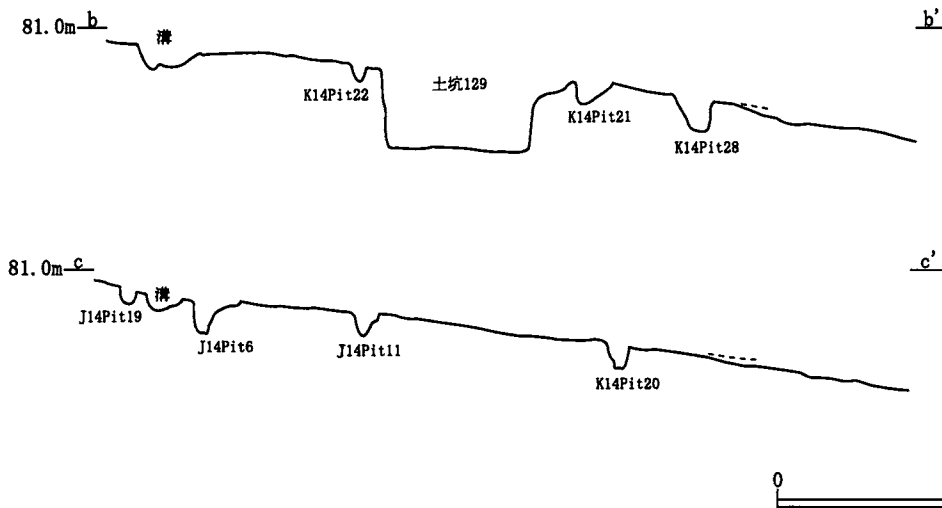
第49図 弥生時代及び中世（13～15世紀）・近世以降の遺物分布図 (1/900)



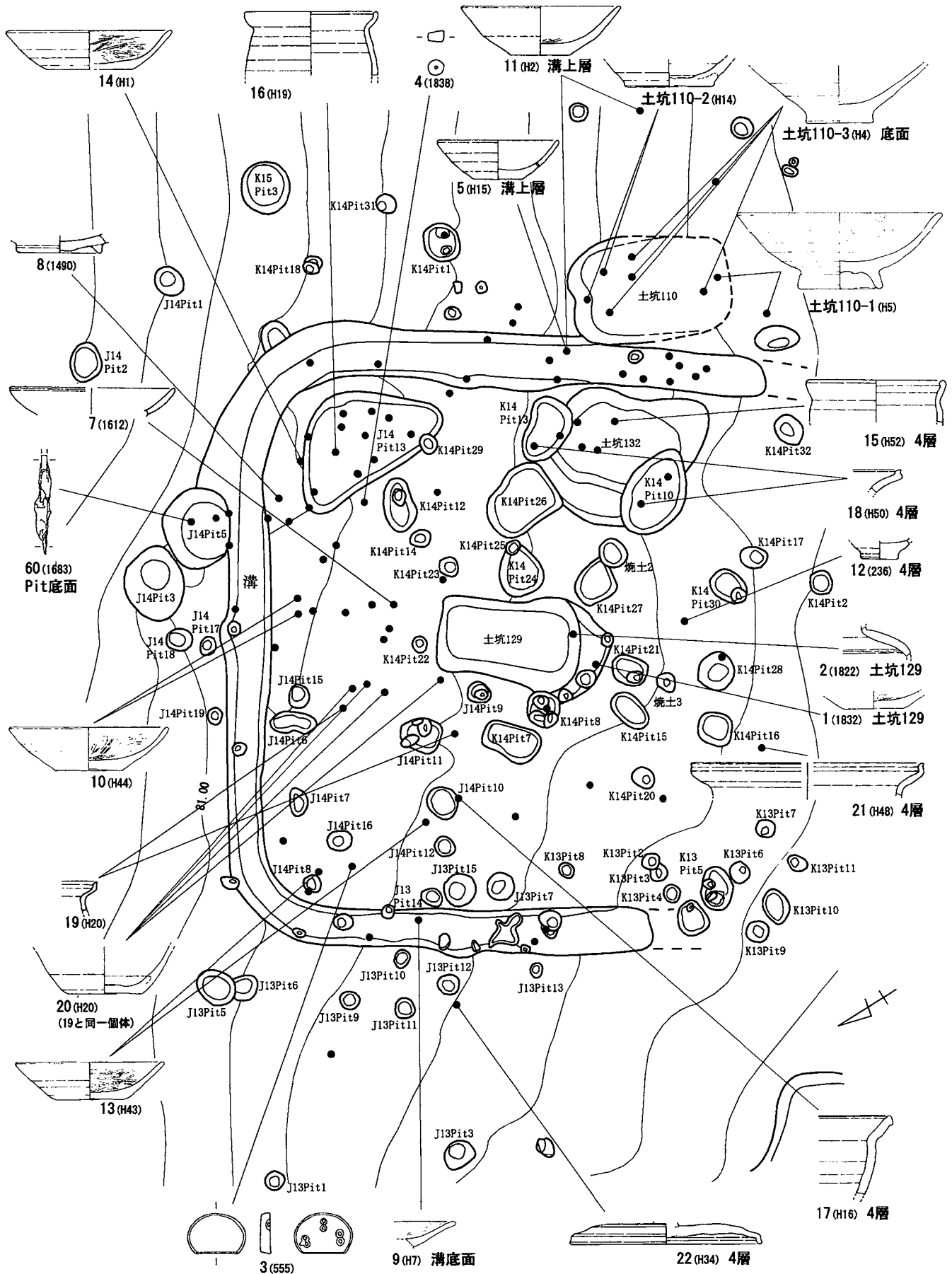
第50図 古代・中世遺物分布図 (1/600)



層	土色	粘性	しまり	かたさ	内容物・備考
方形周溝状遺構内貼床-1	10YR2/2	やや大	やや大	やや硬い	焼土1%、炭化物1%、粘土1%、黄砂1%
方形周溝状遺構内貼床-2	10YR2/3	やや小	やや小	やや軟らかい	焼土1%、炭化物1%、粘土5%、黄砂5%



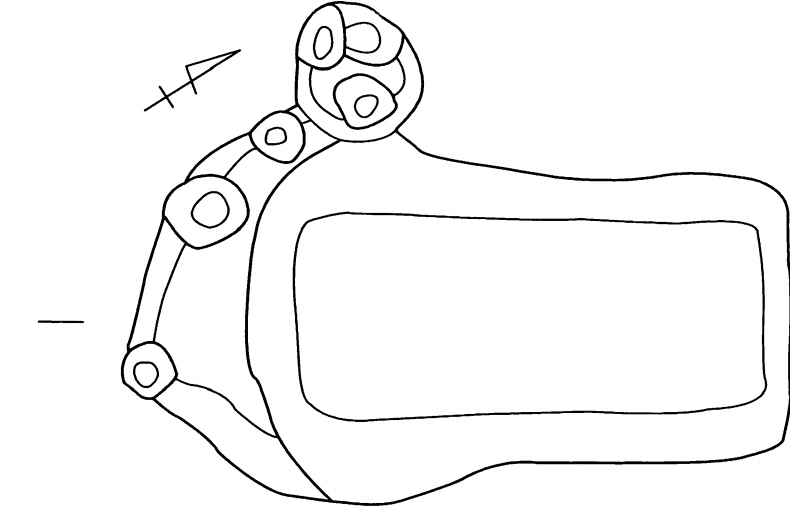
第51図 古代・中世の遺構 方形周溝状遺構 (1/100)



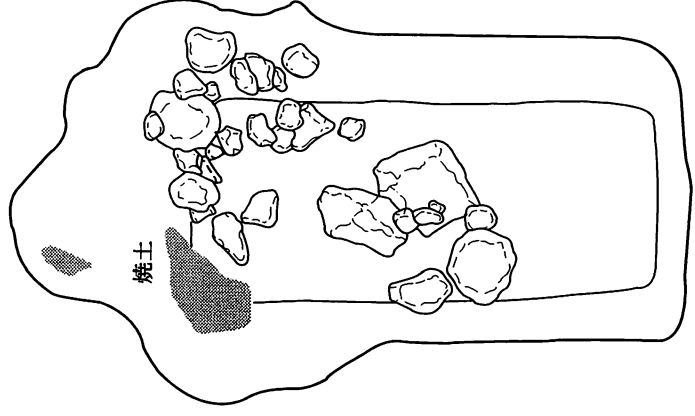
(遺物番号は第55・57・58図に、層は基本層序に対応)



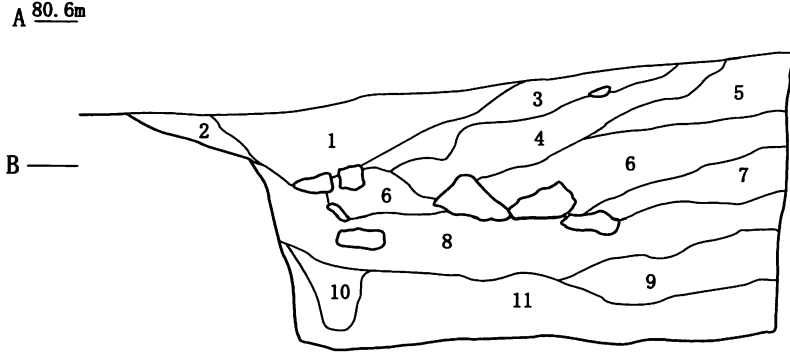
第52図 古代・中世の遺構 方形周溝状遺構及び周辺遺物分布図 (1/80)



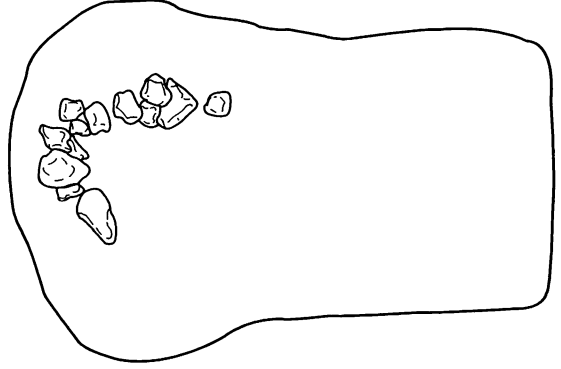
完掘状態



石出土状態 (見通し)

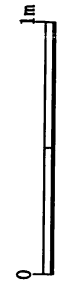


B



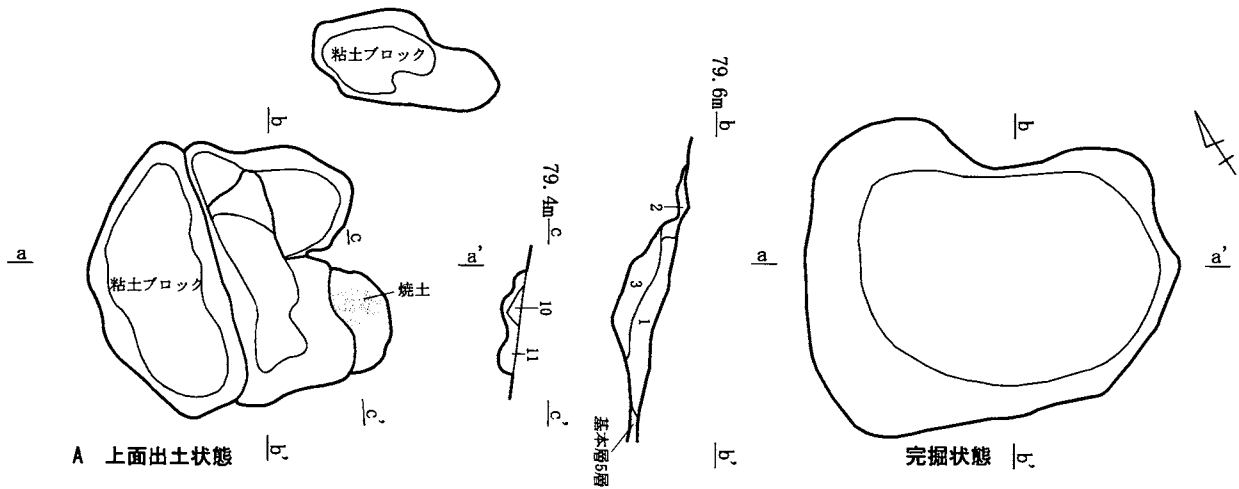
中層の石積み状態

層	土色	粘性	しまり	かたさ	内容物・備考
1	10YR3/3	小	小	軟らかい	小礫5%、焼土5% 上層
2	10YR4/6	やや大	大	やや硬い	黄砂20% (ブロック状) 上層
3	10YR4/3	小	大	やや硬い	黄砂5% 上層
4	10YR2/2	大	やや小	やや軟らかい	焼土5%、炭化物2%、黄砂5% 上層
5	10YR3/2	やや大	やや小	やや軟らかい	黄砂10% 上層
6	10YR4/3	やや大	小	やや軟らかい	黄砂20% 上層
7	10YR3/2	やや大	やや小	やや軟らかい	黄砂15% 上層
8	10YR2/3	やや大	やや大	やや軟らかい	焼土1%、黄砂15%、上面に礫多 下層
9	10YR3/2	やや大	やや大	やや硬い	黄砂20% 下層
10	10YR2/3	やや大	小	軟らかい	黄砂6% 下層
11	10YR3/2	やや大	やや大	硬い	粘土3%、黄砂35% (ブロック状) 下層

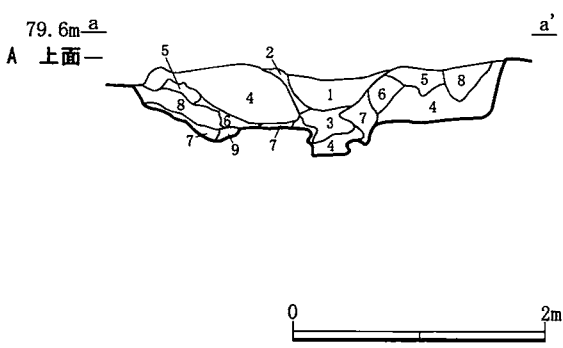


第53図 古代・中世の遺構 土坑129 (1/30)

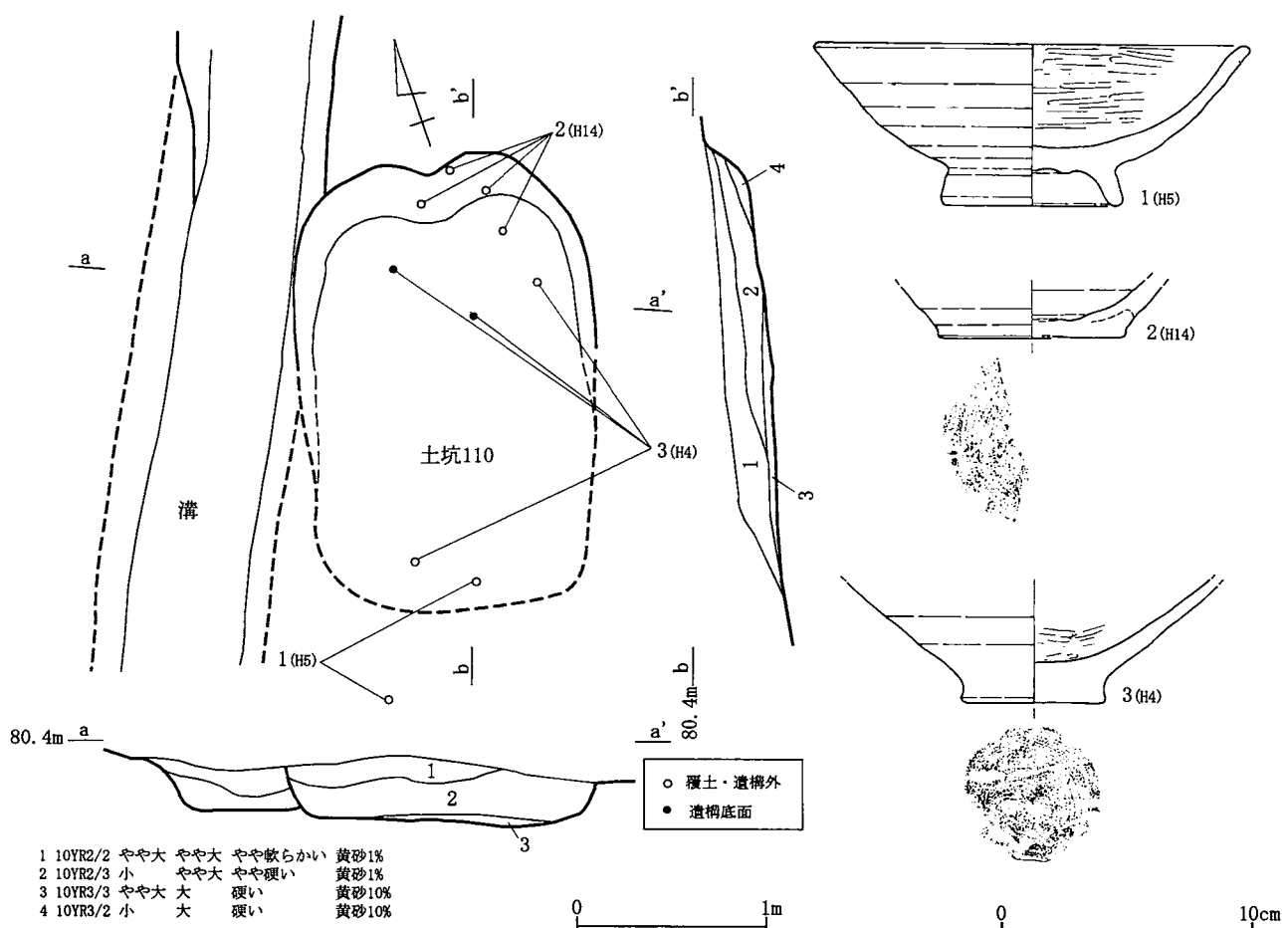




層	土色	粘性	しまり	かたさ	内容物・備考
1	10YR2/2	やや大	大	硬い	炭化物2%、黄砂1%
2	10YR2/3	やや大	やや大	やや硬い	焼土1%、炭化物1%、黄砂3%
3	10YR2/2	大	大	硬い	黄砂1%
4	10YR7/4	大	大	硬い	粘土100% 粘土層
5	10YR5/2	大	大	やや硬い	粘土15%
6	10YR6/3	大	大	硬い	粘土70%
7	10YR5/2	大	大	やや硬い	粘土15%
8	10YR3/2	やや大	やや大	やや軟らかい	粘土5%、黄砂5%
9	10YR7/4	大	やや小	やや軟らかい	粘土100%
10	10YR3/2	やや大	やや大	やや軟らかい	焼土25% 焼土層
11	10YR2/3	やや大	やや大	やや硬い	黄砂3%

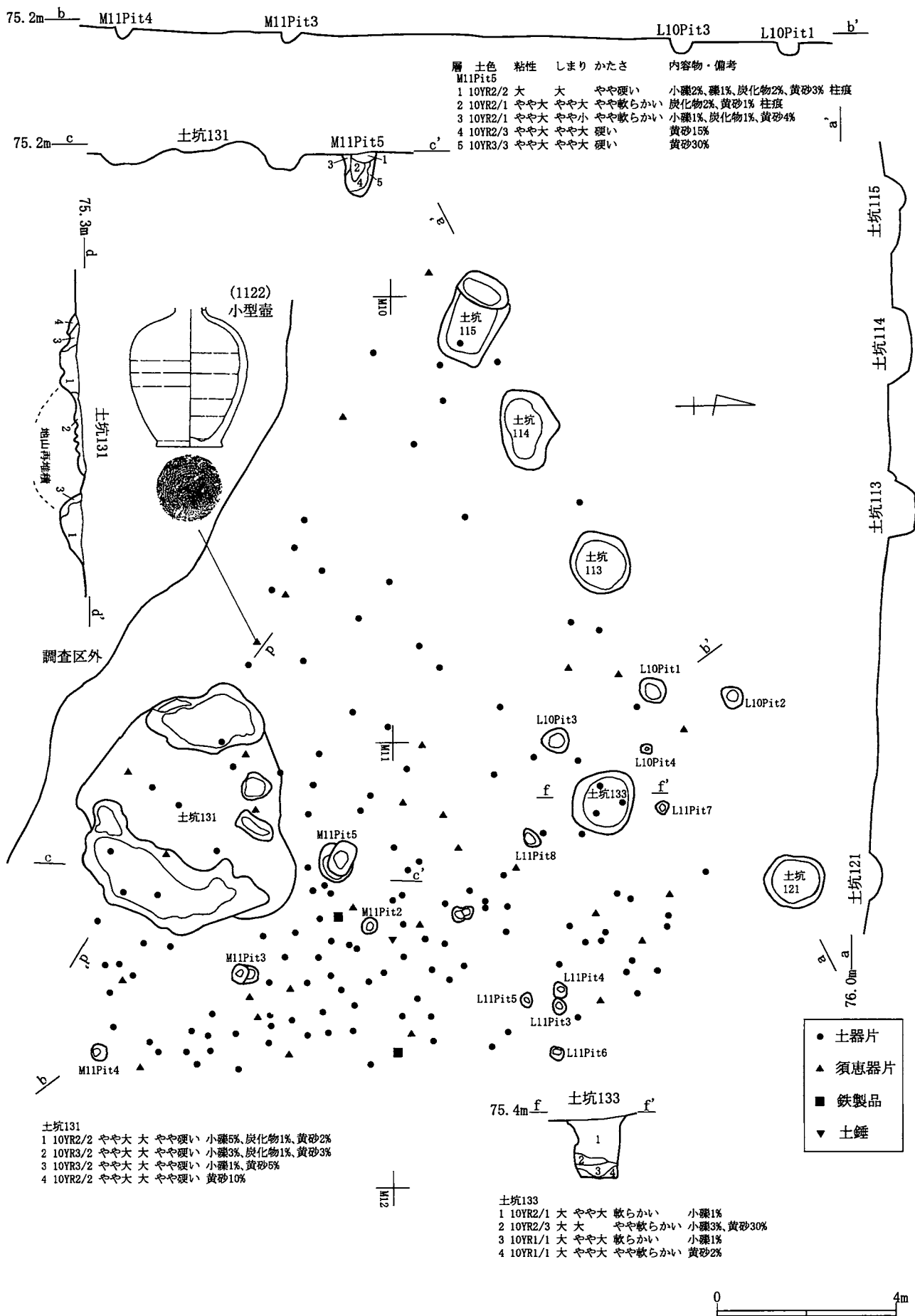


第54図 古代・中世の遺構 焼土4 (1/60)

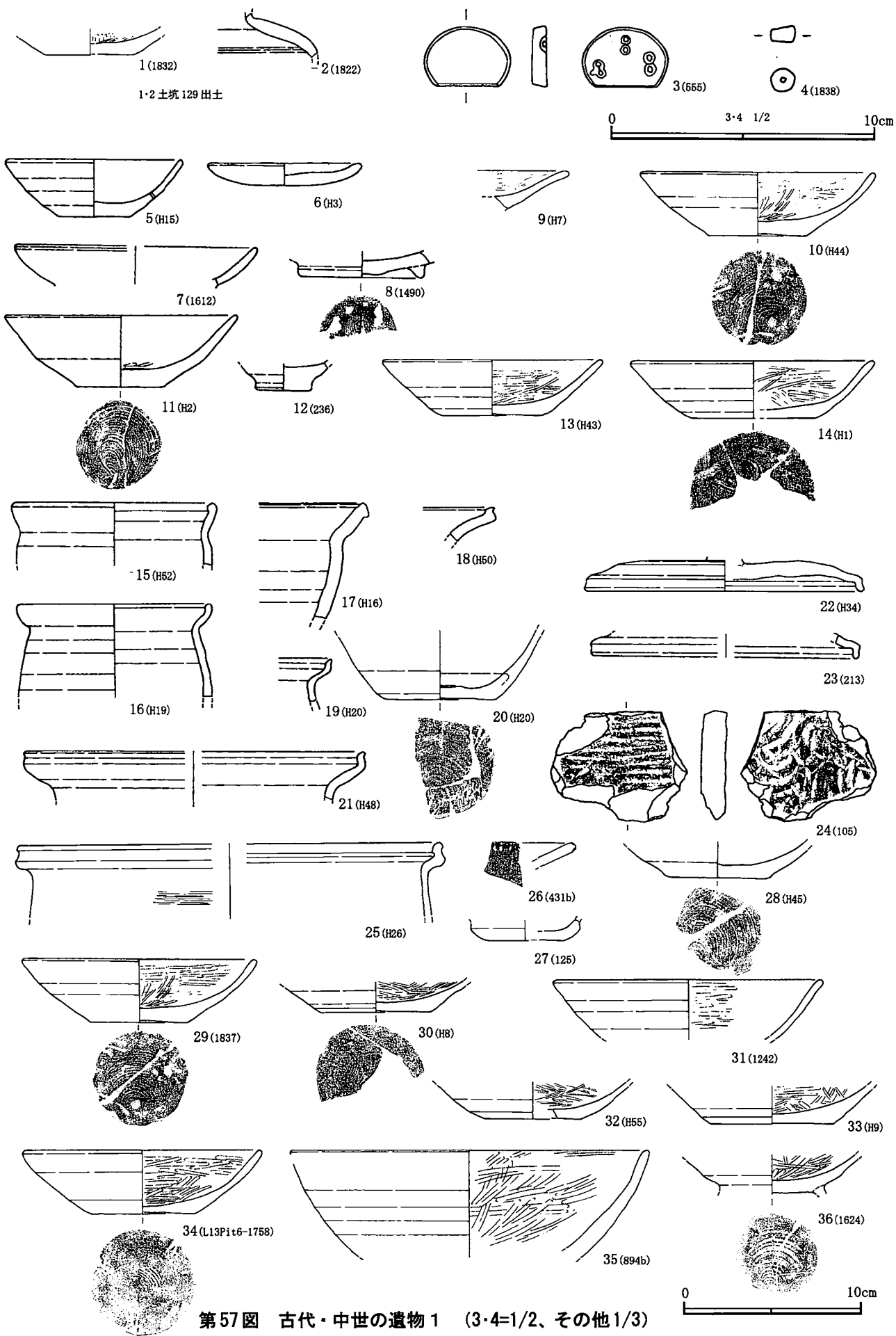


1	10YR2/2	やや大	やや大	やや軟らかい	黄砂1%
2	10YR2/3	小	やや大	やや硬い	黄砂1%
3	10YR3/3	やや大	大	硬い	黄砂10%
4	10YR3/2	小	大	硬い	黄砂10%

第55図 古代・中世の遺構 土坑110(1/40), 遺構出土土器(1/3), 周辺出土土器(1/3)

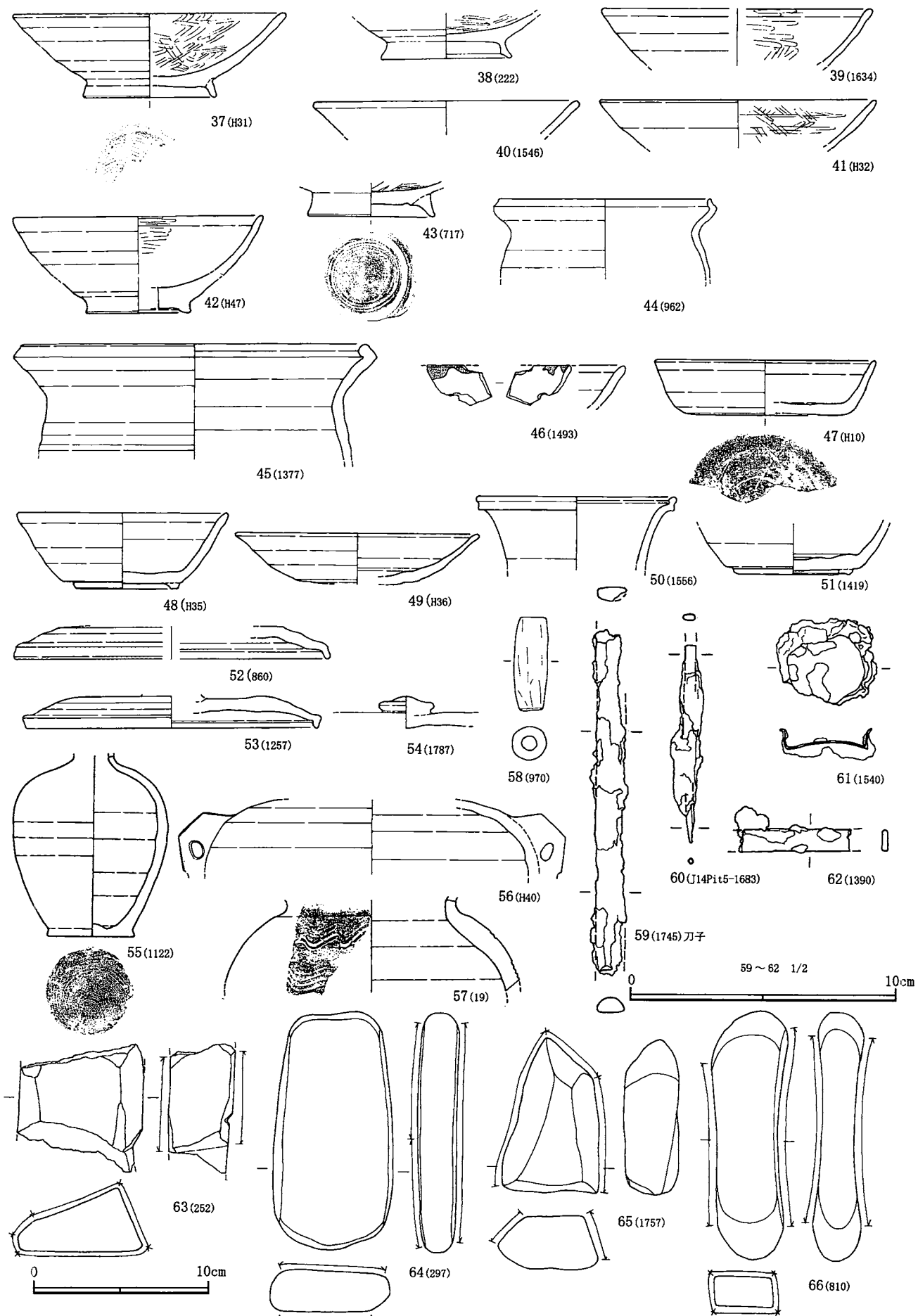


第56図 古代・中世の遺構 土坑131及びその周辺 (1/120)



第57図 古代・中世の遺物 1 (3・4=1/2、その他1/3)

1・5～21・25～36 土師器, 2・22～24 須恵器, 3 石帯, 4 ガラス玉



第58図 古代・中世の遺物2 (土師器・須恵器・砥石・管状土鍾=1/3、金属製品=1/2)

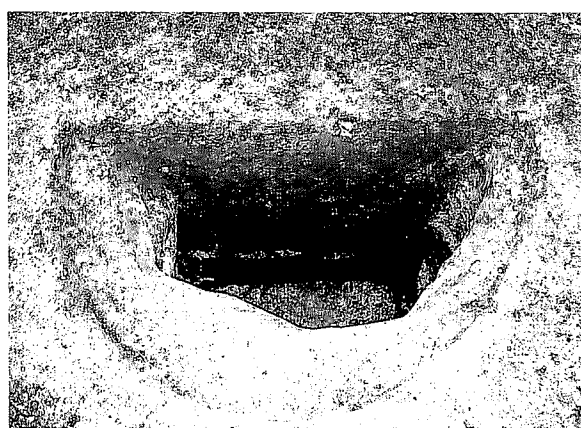
37～45 土師器, 46～56 須恵器, 57 珠洲焼, 58 管状土鍾, 59～62 鉄製品, 63～66 砥石



調査区遠景



縄文時代 土坑 25 完掘状況



平安時代 L 11 区 Pit 1



平安時代 焼土 4 粘土ブロック



平安時代 M 11 区土坑 131



平安時代 方形周溝状遺構周辺



平安時代 方形周溝北東側



平安時代 土坑 129 礫出土状況



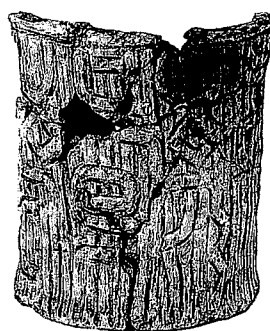
平安時代 土坑 129 完掘状況



方形周溝状遺構 完掘状況

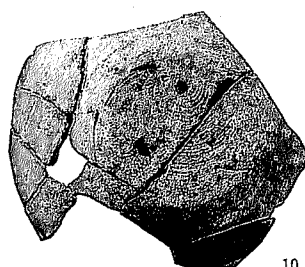
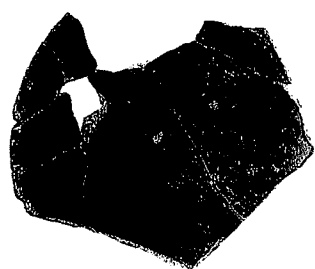


1  
(土坑22 J28)

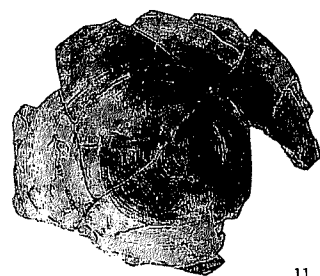


11  
(J85)

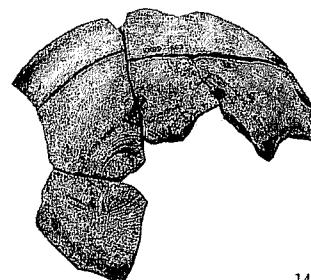
縄文時代の遺物



10  
(H44)

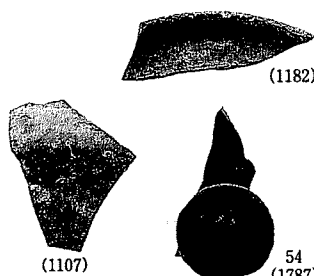


11  
(H2)



14  
(H1)

方形周溝状遺構出土遺物



(1107)



54  
(1787)



(645)

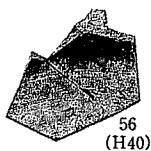
須恵器



47  
(H10)



(H39)



56  
(H40)



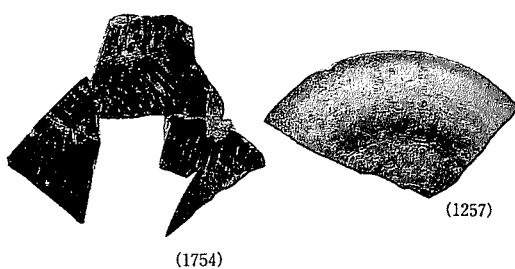
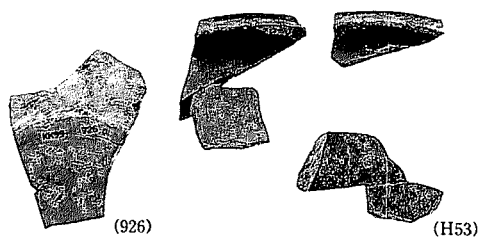
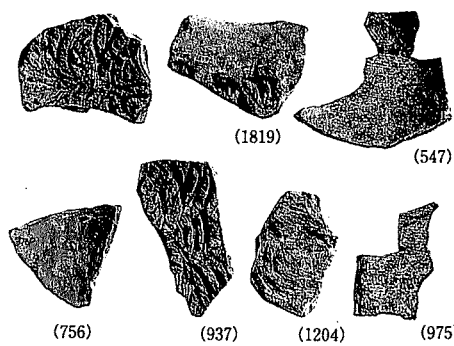
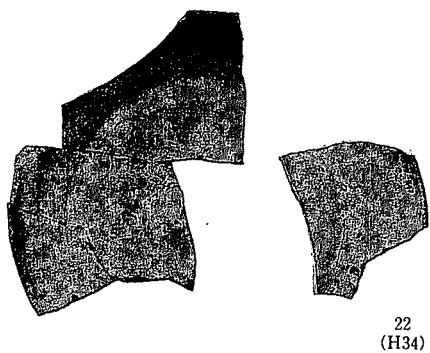
(919)



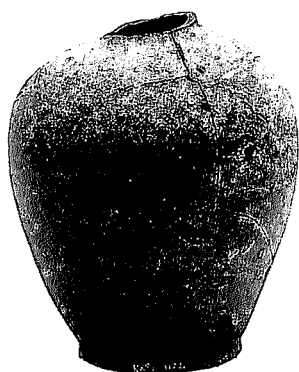
(1396)

須恵器

古代・中世の遺物



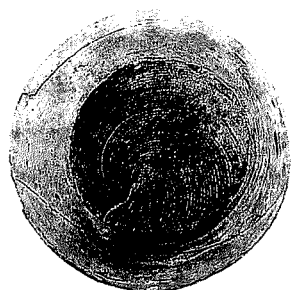
須恵器



ガラス玉

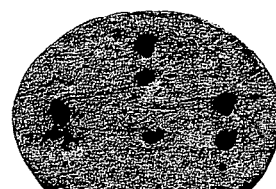
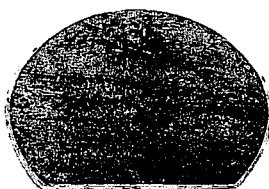
土錘

鉄製品



55  
(1122)

須恵器壺



古代・中世の遺物

石帯

3  
(555)





金沢大学宝町遺跡医学部附属病院地区出土陶磁器



金沢大学角間遺跡第2 調整池南地点出土縄文土器